

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

第3回フォーラム検討会議

逐語録

(木村) それでは、第3回のフォーラム検討会議を始めたいと思います。まずは資料を確認します。まず、議事次第(F3-0)があります。次に、第2回フォーラム検討会議の議事録案と逐語録が合わさったもの、こちらがF3-1です。次に、フォーラムに関する議論の整理という資料がF3-2です。それから、フォーラム参加者を選択するためのアンケートです(F3-3)。今日新しく用意した資料は、この3つになります。

その他に、前回の資料、F2-5のアンケート案(本調査)と、F2-6の「原子力村」というパワーポイント資料も今回用いますので、ご用意ください。なお、いくつか部数を用意していますので、もしお手元になければお配りいたしますが、いかがでしょうか。

それでは、議題を進めていきたいと思います。よろしくお願いします。

0. 議事録確認

(木村) それでは、議事に従って議論を進めていきたいと思います。まずは議事録確認からしていきたいと思います。F3-1をご覧ください。

ポイントだけ説明していきたいと思います。今回は、フォーラムの検討を行ないました。「観察者の目的設計」ということで、少し議論がありました。太字のところがポイントということで、そちらだけ少し読んでいきたいと思います。

「ムラびと」と「市民」の本質的な差は「原子力の知識」なので、これが生きるような議題設定をしないと意味がないのではないか、という論点に対して、特に活発な議論がなされたということになります。いろいろ議論がありまして、結果として、フォーラムの中にやはり原子力の話題を入れる必要があるだろうということになりました。原子カムラを越えるという目的のために行なうフォーラムですので、やはり原子力の話題を入れる必要がある。

ただし、1回目のフォーラムのテーマは、例えば「社会的リアリティの違いを認識する」にしてはいかがでしょうかというようなことになりました。また、専門家の中でも、専門分野の違いによって、感覚、社会的リアリティに違いがあるのではないかという議論が出てきています。まとめとして、市民と専門家が、お互いに「社会的リアリティ」の違いを認識することが大切と書いてあります。

それから、「観察者の目的」と「フォーラムの目的」を両方明示するという点について、若松さんの事例ではどのようになっていたかを調査してほしいというコメントが出されていました。

「フォーラムの目的設定」については、市民のメリット、専門家のメリットを少し整理しました。

また、次のフォーラムの運営方法ですけれども、意見を言いあう立場だけでなく、第三者として二者、専門家と市民という意味だと思いますが、の意見を聞く立場を設けてはどうかと。つまりファシリテーター役を順番に回すということをやったらどうでしょうかという提案がなされています。

次に、「市民パネル募集、決定」。市民、専門家共に、両極端な人が選ばれることが望ましいという議論がありました。市民側でどう分類するかという議論がなされました。年齢、職業、学歴系などだろうかというのが前回の議論です。

市民のほうの議論はここでストップしまして、専門家のほうの議論が出ています。ひとは、Q5～8の質問ではグラデーションがつかないのではないだろうかということ。それで、専門領域で分けるというのもひとつの方法ではないか。そういう文脈の中で、フォーラムに参加を希望する専門家は、リスク・コミュニケーションなどに関心がある人ばかりになってしまうのではないかなという議論が出ています。

その下は、アンケートに関して、いろいろな議論がなされたということです。調査票の内容について各自が検討し、12月5日に行なわれる、本日ですけれども、第3回フォーラム検討会議で議論を進めることになったということです。

2番の「原子カムラについて」は、本日ぜひお話をしたいと。前回のように終わらないで、今日はぜひお話しして、少しどういうものかということ議論したいと思います。

その他のところでは、今後の予定の説明をしました。

ということで、議事録としては以上になりますけれども、前回の中身を思い出していただければと思います。何か修正等ございましたら、言っていただければと思います。

私から1点、2ページ目に、「社会的リアリティ」（解釈、感覚、発想、好きか嫌いかな）と書かれていますけれども、これは少し違うかなと。「社会的リアリティ」というのは、その人が、社会について何が「普通」と思っているかということですね。その他にも、解釈、感覚、発想、好きか嫌いかななどでも差が出ると思われるけれども、その中でも本質的なところは「社会的リアリティ」なのではないかということ。カッコ内は削除してもらっても構わないかなと思います。「社会的リアリティ」というのは、その人を取り巻く現実がどういうものかということですね。誰と一緒に働いてとか、そういうことになりますので、誤解のないよう、よろしく願いいたします。

それでは、前回の議事録については、また何かあればメールでも言ってくだされば、随時修正していきたく思いますけれども、とりあえず現時点ではこれを議事録とさせていただきます。また、細かい話は逐語録がございますので、こちらのほうを参照してください。

1. フォーラムの検討

(木村) それでは次の議題に移ります。フォーラムの検討ということで、前回のフォーラムの議題の続きをやっていきたいと思います。F3-2 をご覧下さい。こちらの資料は、前回の「フォーラムに関する議論の整理」を更新したものになります。基本的には、下線部がついているところが今回付け加えたことになります。これを見て、前回の議論を経たポイントを再確認していきたいと思います。

まず、「観察者の目的設定」のところですが、最初の中黒の二重丸、ここに関しては前回と変わらずです。基本的に我々研究者グループとしては、「ムラびと」と「市民」との相互作用(ダイナミズム)を記述して、「原子カムラ」を越えるための要件を洗い出すということが、目的になります。

その目的を達成するための条件として、どういうことが必要なのかということで、コミュニケーション(情報の移動)が起こることと書いています。本来の意味を、私のほうで追加しています。下線部になりますが、コミュニケーションの本来の意味は、「人と人とが互いに関わろうとする試みであり、話しかけ、応じていくツウウェイ」であると。これは福田さんの「コミュニケーション・センス」という本からとってきた定義です。

次の星型のポツですが、お互いの中で情報の移動が起こって、相互作用としてお互いに変化が起こるとということが、コミュニケーションを考えると時には大切であるということです。

したがって、情報がやりとりされているのだけれども、お互いに変わる気がない場合は、実はそれはコミュニケーションではないというのが、高度なコミュニケーションという意味では必要な条件になってきますので、今回の場合は、「ムラびと」と「市民」との間で、どうやったら「変化」をお互いに起こせるかというのが、大きなポイントなのかなということで、書きました。

次の三角のポツです。情報の移動が「市民」→「ムラびと」になる話題を見つけると。この移動が「価値がある」と共有できるような話題であるというのが、フォーラム参加者の目的になるのではないかと書いていました。その中で、先ほどの議事録の中にも書いてありましたが、原子カムラを越えるということが目標であるので、原子力の話題を避けることはできない。

原子力の話であっても、例えば「安全神話」「リスク」等の話であれば、市民がどのように考えているかをムラびとが知ることは価値があると思われることであって、ムラびとがその価値を認めるのであれば、「市民」→「ムラびと」の情報の移動が起こりうるだろうということです。

さらには、「放射能」「原子力発電」そのものであっても、市民は日々の生活からの感覚でそれらについて話すことができるのであって、ムラびとが市民の考え方を知ろうという気持ちがあれば、「市民」→「ムラびと」の情報移動は起こりうるということです。

最後の星印のところ、情報移動が起こったということが、相互作用的な「変化」が起こったこととは違うということは、注意をしておこうかなと思って書いております。まずは情報移動が起こること自体が重要なことだとは思いますが、それだけではたぶんムラは越えていけないので、どうやってムラを越えるような変化をお互いに起こすかということが大切なのかなということを思った次第です。

次は、お互いの解釈・思い込みの変容、価値観の変容、リフレーミング、新しい気づきが起こる。これがまさに相互作用的变化として期待されるものですが、これについては、どうやったらいいだろうかということで、先ほどの議事録にもありました「社会的リアリティ」、その人が生きている世界はどういうものか、誰が周りにいて、どういうことを考えていることが「普通」なのかということ、社会的リアリティというものを簡単に言うところということになりますけれども、その共有が大切だろうということが、この前のまとめになります。それなので、5回のフォーラムのうち、第1回目は社会的リアリティを共有する枠組みにしてはどうかという話がありました。本日はこのことを、具体的にどのようにスケジューリングするかということも含めて、考えていきたいと思っております。

次の星印ですけれども、経験上、「自分の意見を言う」というよりも、むしろ自分の意見は伏せておいた上で、周りの意見を聴き、場を作っていくという「ファシリテーション」をしていると「気付く」ことが多いと。これは経験則としてご意見がありましたので、こういうことを基にして、それでは参加者が順次交代して「ファシリテーター」をやったらいいのではないかということです。こちらに関しても、具体的にどうしたらいいかということも議論していきたいと思っております。

次の星印。ファシリテーターの存在は、自分の発言の意図が正しく伝わっているのかどうか第三者に判定してもらえらる効果などがあるということで、ファシリテーターはいずれにしても必要であろうということ。

初期の段階で、議論のベースとなる知識を、専門家から市民に説明してもらう時間を設けてはどうか。専門家には、自分たちの言葉が市民にスムーズに伝わらないことを実感してもらおう。市民は、専門家に徹底的に質問できるようにする。そのことで、立場を越えた信頼も生まれるのではないかと、というような、これは具体的なご提案のひとつだと思います。ただし、「ムラびと」対「市民」のような構図になってしまう可能性があるということも注意点として示されていました。

観察者の目的ということで、目的を達成するためにどんな条件が必要なのかということに関しては、かなり前回議論が進みまして、それなりに一通り意見出たかなと思っておりますが、ここで皆さんから、他にもこういうことに関して、もう少し議論しておいたほうがいいのではないかと、というのがございましたら、意見をいただきたいと思っておりますけれども、いかがでしょうか。

—— フォーラムの時間は、どのくらいを設定しているのですか。

(木村) それは、「フォーラムの内容・段取りの決定」というところで議論しようと思っています。1回につき何時間か。これは中身のスケジューリングと一緒に決めないといけなかなと思っています。ただ、5回でかける5時間だとあまりにも大変な気がするので、どうかとも思っていますけれど。

もし、何時間かということと、条件に関わるとしたら、今言っていただきたいと思いませんけれども。後でも大丈夫ですか。それとも、時間がないと、十分には議論できない可能性があるということを懸念しての質問ですか。

—— そうですね。

(木村) どうでしょうか。とりあえず「変化を起こすためには、フォーラムの時間が十分に必要である」ということを挙げておいて、フォーラムの議論がきちんとされるためには、どのくらいの時間が必要かということは、後で議論できるようにしておきたいと思えます。

他はいかがでしょうか。

—— 話すだけでは、情報共有とか、気づいたとか、それだけなのですが、グループの中に、専門家と市民の人が一緒にいて、そこで何かをする（協働作業）ことで、（主催者側は）何も言わずに、どういう役割になるか自分たちで決めたり、何かをするときに助け合うとか。

—— 協働作業ね。

—— そう。組むということで、どういう組み方だと成功したとか、失敗したとか。そこで助け合ってもらったりしたということで、信頼関係が生まれてきて、何かそこから少し物事が動くかなと思うので。

—— 「助け合い」というよりも、やはり「協働作業」と言ったほうがいいと思う。助け合いというと何か、上下の関係とか。

—— 何か、動きがあるような取り組み。自分で判断して何かする、というものが中に入っていると、もう少し、気づいたことが動くかなと思うのだけど。

—— 議論をまとめるとか。

—— じゃなくて、作業的な感じでしょう。

—— 単に言うのを聞くだけではない、ということでしょう。

—— 例えば、グループを作って、何かテーマを設けて、それを皆さんに分かりやすく伝えるとか、自分たちの主張を伝えるとしても、その中で役割を決めて、何かものを書く人、上手に話をする人、司会をする人、役を決めて何かを一緒にするというだけでも、きっといろいろなことが見えてきたりすると思うのですよ。具体的に何をしたらいいかまでは分からないのだけど、そんな感じにしたらいいかなと。

—— ワークショップでよくやるようなことですね。グループの中で、模造紙にまとめたりとか。

—— 話し合うだけとか、観察するだけでは、気づくことはあると思うのだけど、もう少しそれが「変化」に結びつくような何か。行動というか、集まるといふか、役割というか。何と言えいいか、そこが少しモヤモヤしているのだけど。

—— 言おうとしていることは、なんとなく分かりますね。協働作業をする中では、原子力についての知識があるとか、まったく素人であるということと関係なく、その役割を上手にこなせる人というのが、知識の量と関係なくいたりするのですよね。そういうことにも気がつくということ。例えば、原子カムラの人が、司会をやろうとしたけれども、意外とうまくできなくて、ただのおばちゃんみたいな人が意外とうまく仕切ったりとか。そういうこともあって、うまく何かに気づくのではないかということ。

—— そう。それで、いくつかグループがあれば、専門家の人が上手にやっちゃったことで、見た目はすごくいいのだけど、聞いているほうはまったく分からないようなまとめになっていたりとか、そういう現象も現れてくるかもしれない。そういうことがいろいろ出てくると、もっと気づき、動きになるかなと思った。変化になるかなと思った。

(木村) そうですね。気づくだけではなくて、やはり「変化」をどうやって起こすかということですね。

—— 「起こす」かは言いすぎな気が…、「きっかけ」くらいにしておいてください。

—— 人によっては、ものすごい変化になるかもしれないわけでしょう。

—— 私は、今のは重要な問題提起だと思うのですね。例えば 10 人いて、5 人、5 人のグループングにして、5 人の意見をまとめてくださいと。役割をその中で決めることになると思いますけれども、例えば 5 人の意見をまとめてくださいという形で展開をする。

そうすると何が起きるかという、そこにひとつの、今木村先生の説明された「社会的リアリティ」が発生するわけなのですね。5 人というグループの意見をまとめる。一般的な家庭の主婦の方だと、そういう機会が少ないと思うのです。私は、原子力ムラのひとつの大きな要因は、別に原子力に限らないのですが、そういう組織の中で自分の意見をどう通すか。そういうグループができると、できるだけグループの和を守りたいという自然の成り行き、これは日本人の特性なのだと思いますけれども、あまり突出した意見を出しづらくなるのですよ。

だから、5 人のグループングをして、そこでまとめてくださいね、という場を設定すると、ムラびとと一般の方の社会的リアリティが、ある程度近接するというのでしょうか。

場の設定として、それがいいか悪いかは別なのですが。まったくそういうグループング抜きに、ご自由に意見を言ってくださいという形がいいか。それとも、グループ編成にしてまとめましょうという枠をはめて意見を出すのがいいのか。ここは考えどころだと思いますね。

—— 質問していいですか。(社会的リアリティが) 近づくというのは、お互いにある程度相手を理解するということですか。それとも妥協点を見つけるということですか。

—— 要するに、ムラびとのほうも、それぞれの所属している組織で、自分の意見をどうやって反映させるかということ、日常、新入社員で入ったときから、ずっとそういう環境で仕事をするわけですね。学会もひとつの組織ですから。あるいは企業でも研究機関もそうです。

今日持ってきた本に書いてあるのは、これは自民党の塩崎先生が書かれたのだけど、日本人というのは、原子力に限らず皆同じなのだと。こんなことを言うと、組織の他のメンバーに大きな迷惑がかかってしまうから、どこまで自分の考えを言うのがいいのかというのを、雰囲気を見計らいながら意見を言う。だから、これは原子力に限らず、あらゆるところでそういうことが起きていると。だから日本人社会というのは、どうしても、いわゆる出る杭は打たれるではないけれども、あまり突出したことは控えようかなという、そういう自制心が強くはたらくのが日本の社会のひとつの特徴ではないかということ、この人はおっしゃっています。

そのひとつの現れが原子力で、例えばシビアアクシデント対策をなぜやらなかったか。やれという、電力会社は大きな投資をしなければいけない。あるいは、シビアアクシデントが起きると言ったら、地域の人に対しても波風が立つ。事業者に対しても波風が立つ。お役所の人、円満におさまっているのに、そのことを言いだすと、大騒ぎになるから嫌

がる。そうすると、どうしてもやらなくてはいけないと思っている研究者も、非常にまろやかな言い方になってしまう。そういうことが起きてきたのではないかと。

だから、それは別に原子力に限らず、どこの社会にもあるから、グループで 5 人で意見をまとめてくださいと言うと、いろんな人がいるから、まとめようとする、どこかで自分の意見を抑えるベクトルがはたらきますから。そういう中で、その雰囲気少し共有できる可能性があるかもしれないと思うのです。だから、テーマは何にするか分かりませんが、あるテーマについて、5 人の意見をまとめましょうと。私が言ったのはそういうことです。

(木村) 要は、グループで何かをまとめようとしていくことによって、普段の自分のリアリティを脱して、違うリアリティを实践できる可能性があるということですよ。

—— そうです。ムラびとたちのそういう社会的なリアリティを共有する、ひとつの場の設定になるかもしれない。5 人で意見をまとめるって、5 人でも大変なのですよ。

—— 2 人でも大変ですよ。

—— 意見が違って、まとめるって難しいよね。

—— 旅行はだから偶数ではなく、奇数人にするのがいいとよく言いますが、偶数だと、2 対 2 に分かれちゃったりするから。

(木村) かなり具体的な議論になってきています。ここの議論はもう少し具体的なスケジュールなどを話し合うときに出てくるかなと思います。「ご協力のお願い」の紙の中にどこまで入れるかというのも、今日少し話せればと思いますけれども、それはある程度の方向性が見えておいたほうがやりやすいと思いますので、その辺はまた改めて、後半に話し合いたいと思います。

その他は、よろしいでしょうか。では、ここの話は、今の議論みたいに、フォーラムの内容を検討しているときには絶対に立ち返ってきますので、また何か思いついたときに言っていただければと思います。ひとまずは次の話にいきたいと思います。

次は、フォーラムの目的設定についてです。これはフォーラムの参加者の視点です。

先に下のほうからいってしまいますが、参加者のメリット、何をメリットと感じるかということ、この前は整理しました。

市民のメリットとしては、研究に参加できる。学術的成果があがる。専門家に会える、会話ができる。意見を言える。わからないことを質問できる。謝金。最後にシンポジウム

で社会に対しフォーラムの成果が発表される、などが市民のメリットとしてありうるだろうということです。

一方で専門家のメリットとしては、市民の感覚を知る。市民と専門家の認識のずれを知る。専門家が過剰反応していたことを知る。というようなことが専門家のメリットになっている。ただ、これらは意識が高い人に対するメリットになっていて、専門家側の動機付けは難しいという指摘もありました。実は「市民パネルの募集、決定」のところでその辺の関わりが出てきます。が、それはまた後ほどの議題ですので、そういうことをまずは整理をしました。

次に、話題の案としては、先ほどの議論にもありましたけれども、「放射能」「原子力発電」など、原子力そのものに関わる話題。あとは「安全神話」「リスク」とか、原子力に関わる話題。そのものか、関わるものかというところで、2パターンのテーマが出てきたかなと思います。この辺も今日、具体的なところで話していければかなと思います。基本的には、原子力に関わる何らかのお話ができるようにすればいいかなと思います。それは直接的に関わるものでも、間接的に関わるような少し概念的な話でも、両方とも成立するのではないかなというのが前回の話です。

最後の三角ですが、基本的には、このフォーラムは何かを求めるものではない、としたらどうかというのが、私の提案になります。ですので、少し前に戻っていただいて、「フォーラム参加者の目的」は、ほぼイコール「観察者側の目的」とするのはどうでしょうかというのが、私の案です。

これは、フォーラムを協力してもらったときの、こういう目的で参加してくださいと言うためのコンセプトみたいなものです。観察者側の目的は、原子カムラを越えるための要件を洗い出すということになっています。「フォーラムの中で、そのムラをどうすれば越えられるかということを検討したい」ということを、やはり言うのがいいのではないかなということで、次の文章を作っています。一応読みます。

私たちは「原子カムラ」を越える、(越えると言われてもよく分からないかなと思ったので、よりインセンティブをはたらかせるために「解消する」のほうがいいかなと思って、ハテナで書いていますけれども) 越えるために、どのような仕組みが必要なのかを明らかにする研究を行っている。(文章に書くときには、丁寧語にします。) そのために、私たちは「フォーラム」と呼ばれる仕組みを提案している。「フォーラム」は、首都圏在住の人々10名と日本原子力学会員の人々10名が参加し(人々10名という表現はおかしいですね)、原子力を含みながらもその他いろいろな話題を対等な立場で話すことによって、原子力リスクの今後の対応について、協力して取り組んでいくための基盤を作り出すことを意図して作られている。

皆様には、ぜひこの「フォーラム」にご参加をいただき、「原子カムラ」を越える(解消する?) ための仕組みを作り上げていくことにご協力いただきたい。

こういう感じにして、フォーラムに参加して、ムラを越える仕組みをどうやって作るかを一緒に考えてほしい、ぐらいつもりで言うてしまうといいのではないかと思って、提案をさせていただいています。

ということで、ここでは、私の案をたたき台として、いろいろご意見をいただければと思います。いかがでしょうか。

若松先生の話を受けて、こういうのはありかなしかというと、どういう感触ですか。こういう目的を設定して、問題はないかどうか。

(竹中) 問題はないと思いますけど。

—— 2行目の、「フォーラムと呼ばれる仕組みを提案している」という言い方、フォーラムが解決するのではなくて、フォーラムを通して、それを見つけていくということですよ。フォーラムという仕組みができるのと解決する、みたいに見えるけど、そうではなくて、今後何回か開くフォーラムを通して見つけていく、みたいな表現のほうが、いいと思います。

—— そうかもしれませんね。

—— フォーラムという枠組みさえ作れば、解決するのか。一般から見ると、そう見えてしまうのですけど。

(木村) 一文目の、「どのような仕組みが必要なのかを明らかにする研究を行なっている」ということに関して、これは完全に研究者の視点の目的ですけれども、こういう言い方で分かりますか。

—— 分かります。

—— 「越える」より「解消する」のほうが分かりやすいかな。

—— 仕組みを活用して、とか。

—— そのほうが自由な感じがありますよね。

—— 自分も変化させる一員になれるという、書いていないインセンティブのひとつになるので。そういう言葉をいわれると、つい参加したくなりませんか？

—— なりますね。

—— 今のところは、参加者のメリットの、研究に参加できる。学術的成果が上がる。それから、最後にはフォーラムの成果が発表される。そういうところにもっとメリットとして強調できるかなと思います。

あと、専門家のメリットとして、あまりピンと来るものがないのではないかということですが、例えば、分かりやすくあまり突っ込まれない話し方みたいな。マスコミ対応とか、一般市民向けの説明会の話し方とか、そういうものも上手になるというのはどうですか。市民の感覚を知ることによって、こういう言葉はそうやって受け取られてしまうのかということを知って、マスコミ対応が上手になる。

いろいろな説明会やマスコミに露出した専門家の方が、言葉尻をとられて責められちゃったということが結構あったと思うのです。せっかく良いことを言っていたとしても、ちよつとした言葉づかいで変なことになってしまったり。そういうことがないように、ここで勉強できますよ、みたいなのはどうですか。

(木村) こういうのもうまく言っていったほうがいいのでしょうか。

—— 専門家のメリットは、観察者と同じメリットを入れてもいいような気もするのですが、つまり、今のご指摘と同じかもしれませんけど、原子カムラを越える何かのヒントが得られるというのは、専門家にとっては、ものすごく大きなメリットですよ。

(木村) 確かに。

—— 今の、コミュニケーションの方法もさることながら、もっと深い、自分自身のスタンスというか、コミュニケーションするとき、どういうスタンスで語ればいいのかという、そういう本質的な問題をつかめれば、これは非常に大きなメリットですよ。

(木村) そうですね。そういうことがちゃんと伝わるように、ここの文章を作ればいいのです。

—— 「専門家が過剰反応していたことを知る」。この「こころ」もそこにあるのかもしれませんが、ね。

—— (市民とムラびとの) 両方に同じ文章でお話するのです。

(木村)　そうです。どうでしょうか。変えても構わないかもしれませんが、同じほうに変なことが起こらないかなと思っているのですけれど。

—— 研究に参加できるというような話は、両方にあってもいいと思いますね。

(竹中)　この文章を読んだとき、こういうフォーラムに参加してみたいけど、原子力は嫌いだという人は、参加してきてくれる感じですか。それとも、しにくくなっちゃう感じですか。

—— 参加してくると思いますけど。原子力嫌いだという人は、最初からまったく近寄りもしないということですか。

(竹中)　まったく近寄らないと決めてしまっている人は、どう書いても近寄ってこないと思うのですけれども。

話してみたいなと思っている人たちが、敬遠する内容でないかどうか、ということですか。

—— 原子力が嫌いというのは、反対しているということですか。

(竹中)　そうです。反対している人にも入ってきてほしいですね。

反対しているのだけど、話し合いには参加したいという人たちが、来たくなるような文章だといいなと。そこら辺の感覚は、私には分からないので、お聞きしました。

—— 私は、下から4行目の、「原子力リスクの今後の対応について、協力して取り組んでいくための基盤を作り出すことを意図して作られている」というところの、「協力して取り組んでいくための基盤を作り出すことを意図して作られている」というのはいいと思ったのですね。だけど、「原子力リスクの今後の対応について」とここではっきり言っていると、私の周りで原子力に非常に関心があって、原子力に反対している人というのは、もう、原子力「リスク」の今後の対応というのは、自分たちが考えていることとはまったく違う方向なのです。リスクの対応なんかしなくていいと。

—— なくせと言っているのでしょうか。

—— そう。そのひとつ手前の話なので。関心があって、迷っている人には、こういう協力を一緒にしたいなって、すごく心引かれる文章なのだけど、反対している人とか、即やめて、という人は、ああ、やはり一緒にリスクの対応するんだ、みたいに感じるかもしれない。

—— 前提として、続けるのよねって。

—— うん。だからここはどうかなと思ったんですけど。

—— 私も先ほどこの文章を読んだときに、そんな印象を持ちましたね。政府のエネルギー・環境戦略で言うと、0%、15%、25%の3つの選択肢が提示された。世の中の人には0%を望む人が多かったと。本当かどうかはともかくとして、そういわれていると。

「原子力リスクの今後の対応について」と言うと、15%なり25%なりの原子力の可能性を、今後増やしていくために、と受け止めるのではないか。だから、この文章は、もう少し広い受け止めがされるような表現のほうがいいかもしれない。

(木村) 「リスク」は外しましょうか。「原子力の今後」について、ぐらいにしますか。対応とか入れるとまたややこしいから。今後の原子力？

—— 「原子力の今後」がいいと思います。

—— 「原子力の今後」だったら全部入りますね。

—— そうですね。なんとなく、選択肢がいろいろあって。

(木村) ちなみに、原子力ムラを「越える」がいいのか、「解消する」がいいのかというのは、どうですか。「解消する」というと、変でしょうか。

—— 逆に、原子力ムラ側の方たちは、解消するといわれてどのように感じるのかなって。

—— 私は、原子力ムラを「越える」という「ぬえ」な表現、何を言っているか分からない表現のほうがいいと思うのです。「原子力ムラ」という言葉にはきちんとした定義がないですから、おそらく10人集まれば10人とも、原子力ムラの、あるかないかということを含めて、イメージが違ふと思うのです。

「解消する」というと、そんなもの解消のしようがないよと思う人もいるかもしれない。

「越える」というと、それを是認して、だけでも、ムラの住民と一般の人がそれを越えて、きちんとコミュニケーションが成り立つということも含むから。解消する、消えちゃう、無くすということから、それを前提にしても会話するということも含むような、何か非常に曖昧模糊としていい表現かもしれないと思っています。

—— 原子カムラを越えるというのは、要するに、原子カムラと呼ばれていることを解消するという意味ですよ。

(木村) そうですね。「越える」にしましょうか。「beyond 原子カムラ」。

—— なんか、前向きですね。

(木村) ここはもう、タイトルにもありますし、これにしましょうか。

—— 「解消する」なんていったら、定義をかなりリジッドにしなければいけなくなってしまふ。

—— そうそう。原子カムラそのものが、今先生がおっしゃったように曖昧ですから。

—— こういうものがあるということをはっきりさせないとね。

—— あると思っているかどうか、人によって違いますし。

—— 原子カムラって言われるから、あるのだと思っているだけで。

—— そう、思っているけど。

—— ムラの住人で、私は原子カムラの住人だと認識しているという人は、おそらく 1 人もいないと思います。あなたはそうよと言われると、ああ、そうなのかと思うだけで。

—— 越えるというより、何か、入ってみたいという感覚はあるのだけど。

—— そのほうが積極的ですね。

—— 越えるというと、その人たちがこちらに来るという感覚でしょう。
境がなくなったら、交わるのだから。

(木村) なるほど。「越える」は、こちらから来るのか、あちらから来るのか、両方ありうるんですね。

—— でも、「原子カムラ」にいる方に、ご自身でそういう意識がないとしたら、あちらか

らこちらに来ようという意識はないのではないかと。

—— むしろ、「原子カムラを越える（交わる）」とか（笑）。

—— だんだん分からなくなる（笑）。

—— ある人に言わせると、原子カムラは解消しようがなく、今原子カムラと揶揄されているのは、原子カムラがだらしがないという意味で、カタカナの「ムラ」で揶揄されているので、もっとしっかりと専門家がムラの責任を果たすべきだと。そのように批判されているのが原子カムラなのだと。そう思っている人もいますから。だからいろいろですよ。

どの世界でも専門性が高い人というのは、非常に深い研究をしているわけだから、それは専門語も難しいし、なかなか一般の人と会話がしづらいというのはどこでも同じです。宇宙の話などはものすごく難しいですから。でも、宇宙の人がいくら難しいことを研究していても、「はやぶさ」とか、非常に立派な成果を残してれば、だれも宇宙ムラを批判したりしないわけですよ。

—— むしろそのムラびとになりたいという、若い人たちの憧れになりますよね。

—— そうですね。宇宙飛行士になりたいと。宇宙飛行士は、年間 500 ミリシーベルトも被ばくするわけです。それを女性でも、ああやって宇宙飛行士になって。

かたや原子力発電だと、5 ミリシーベルトも危険だと大騒ぎする。

この格差は何か。だから、やるべきことをやっているムラの人には尊敬される。原子力のほうは、あんな事故を起こしてしまっ、やるべきことをやっていないではないかと。こういうことで批判されている。

そういう意味で、このタイトルに「ムラ」という言葉がついているけど、「ムラ」という言葉を使うべきではないと言っているムラびともたくさんいるのだけれども、私はあってもいいと思う。そういう議論をこの研究の中で十分突き詰めて、「だらしがない」と。「専門家はもっと専門家らしくやったらどうなの？」という市民の声も、たぶん、今日集まっておられる方々もお持ちなのではないかと。

—— 私は、専門家に今何を一番聞きたいかなと考えたら、事故の後、リスクを小さくする技術とか考え方が、実はいくつもあつたと。それを行政に言いに行ったとか、誰かに言いに行ったということを、テレビで、後で知りましたよね。

それで、どうして現場とか政治家とか行政とか経営者にそれが届かなかったのか、通じなかったのか、すごく疑問だった。言いに行っていた人はいたはずだけど、届かなかった。

言う方向が間違っていたなら、例えば市民に向かって言ってくれば、もっと世の中にも出たかもしれない。でも、やはり私たち（市民）とは全然つながりがなかったから、そういう人に言ったのだらうと思うのですが。そこがすごく疑問だったのです。

私は、専門家の人が殻を破るとしたらそこかなと思っていて。研究してくださっている方はすごくいろいろなことをしてくださっているということは分かったので。

—— 昨日、原子力学会のある集まりで、今のご質問とほとんど同じ質問を、非常に詳しい方がされたのですよ。

シビアアクシデントの研究レポートは、原子力学会でももちろん公開されているところで、山のようにそういう研究論文は出していて、「強化するべきだ」ということを書いてあるわけですが。にも関わらず、今おっしゃったように、活かされなかった。なぜだろうということ、その会議でおっしゃった。原子力学会でいい研究論文をいっぱい出しながら、それが反映されなかったことについて、我々はどう考えたらいいか。そういう問題提起をされていて、大変もつともだと私も思うのですよ。だから、原子力学会はムラと言われるのですが、実は原子力学会がいくらそういうことを言っても、全然政策決定には反映されないということなのですよ。今までは、少なくともされなかった。

だけど、私はその場で言ったのですけども、事故が起きて、世の中の人が高に非常に高い関心を持っているから、今原子力学会が言うと、相当影響があると思いますよ。そんな気が私はしてしまっていて。だから私は、原子力ムラはしっかりするべきだと思う。原子力ムラが、そういう専門的な立場で必要だということ、5年前に言ってもあまり響かなかったけど、今言うるとすごい影響があるような気がするのですね。

だから、そういう意味で、本当にムラを越えて、今おっしゃっていただいたように、一般の方からも関心をもらせるようにしなければいけない。だから原子力学会の会長なり理事会の人たちは、関心を持ってもらうためにどうしたらいいかということ、そういう努力が、過去少し足りなかったかもしれない。

—— それは原子力学会に限らず、学会というのはやはりそういう立場なのですか。

—— 学会は、そうですね。政府にしてみれば、都合のいいときには学会で発表してもらって、それを根拠にして政策変更をするのです。だけど、都合の悪いことをいくら学会が発表をしても、聞き流しているのです。政府はそういうものです。政策変更に使わない理由はいくらでも立ちますから。

本当に政策に反映しようと思ったら、国のしかるべき委員会で発言しないと。ただ、諮問会議とか委員会で決めても、この前の田中眞紀子さんみたいに無視されることもありますけど。諮問会議は単なる諮問であって、大臣はそれを守らなくてもいい、なんて言われたら、それまでの話ではあります。

諮問会議は、現実にはあまり無視できない。だけど学会の発表などは、やはりいろいろな発表がありますから、いちいち全部が政策に反映されるわけではないのですね。

—— 先ほどおっしゃた、(市民が)こちらから入っていきたいというのが、どこかで現れてくればいいと思うのですよ。学会の発表を1回聞きに行ったことがあるのですが、専門家に対する発表だから、すごく難しいのです。

—— 学会に行かれたときに、お気づきになったかもしれませんが、学会の発表でも2種類ありまして。

専門家向けの口頭発表、午前と午後いっぱいあるのは、ほぼ専門家向けです。

午後の1時ぐらいから2時半ぐらいまでに、企画セッションという形で、広い場所でやる発表は、一般の人でも分かるような形でやっています。この2種類があります。

私も、専門家向けのセッションに行っても、ちんぷんかんぷんでやはり分かりませんよ。それぞれの専門領域の人が専門用語でやっているのなんて、たまに出ますけども、相当よく勉強して、専門用語を首っ引きでやらないと理解しづらい。

だけど、その企画セッションのほうは、比較的、誰でも分かるようにやりますから、これは面白いです。しかもテーマが、あまり深く特定のところというより、幅広いテーマでやりますから。だから、もし学会にいかれたときには、そういうセッションだけピックアップしてお聞きいただくと、分かると思いますね。

ただ、今我々も文句を言っているのだけど、午後の1時間ぐらいに集中的にあるので、複数のを同時に聞けないという、そういう不便さはあります。

(木村) 文案は、方向性としてはそんなに悪いものではないということで、2文目ですが、「フォーラムと呼ばれる仕組みを活用して」何かを見つけていく。これは、「どうやって原子カムラを越えるかを」、とかでいいですか。

—— 越えられるか。

(木村) 越えられるかを見つけていく。こんな感じでしょうか。

「原子力を含みながらもその他いろいろな話題を」は、これでいいですか。少し違うような気もするのですよね。ここは少し、後半の話し合いで具体的なことができてから、具体的に書けたほうがいいかもしれないですね。

では、基本的にはこんな方向で作っていきたいと思います。

それでは次に、「市民パネルの募集、決定」ということで、お話を展開していきたいと思えます。

前回の復習にもなりますが、まず、1月実施の調査からそれぞれ10名を選択ということです。

何を基準にするかということで、市民は、社会的リアリティの異なるメンバーを集めるべきということで、年齢、職業、学歴などで判定したらどうでしょうかという話が出ました。それから、個人のライフスタイルを聞くような設問を加えられないかという意見が出ていました。

専門家の基準を考えると、Q5～8ではグラデーションがつかないのではないかとということです。フォーラムに参加を希望する人は、関心がある人だけになってしまうのではないかと。これは、どうなるか分からないけれど、調査票から人選するという方法でやらないと、恣意的になってしまうのではないかとということです、今年はこのリスクを認識しながらもやろうということです。

ということで、前回の宿題で、アンケートの内容について、特にQ8、9辺りについて、少しご意見いただければと思います。

—— 原子力発電に関する質問が多いと思うのですが、「原子力」というのは、原子力発電の技術かもしれないけれども、もっと広い意味を持つと思うのです。

(木村) 前回のアンケートで言うと、どの辺ですか。

—— Q9に、原子力に携わっている人や組織についてという質問がありますね。Q5から8までは、全部「原子力発電」について聞いているわけですが、「原子力発電」に対する質問ではなくて、「原子力」に関する質問、もうちょっと戦略的な、科学技術として原子力を捉えたような質問を1問入れて、原子力の広がりというものに関して、どのような考えをもっているかということを知りたいような質問があればと思ったのですが。

—— それはQ5から9までの、何か1つ取って、入れるということですか。

—— はい。まったく別の質問を。原子力発電ではなくて、原子力技術そのものに関して。もうちょっと、いろいろな役割があるわけで。

—— 原子力の平和利用についてとかですか。

—— むしろ、日本が原子力を持っていることの戦略的な意味、みたいな感じ。

(木村) それは、危ないと思いますね。原子爆弾とかですよ。

—— そうじゃなくて、

(木村) それとも放射線利用とかの話ですか。

—— 小柴先生がノーベル賞を取られた研究、素粒子とか、加速機とか、あれも原子力の分野のひとつなのですよ。

原子力というのは、産業の売上高でいうと 9 兆円ぐらいの効果がありまして。だいたい今は 50 : 50 で、原子力発電が 4 兆 5 千億円、それ以外が 4 兆 5 千億円ぐらい。

それ以外の 4 兆 5 千億の大半が放射線の応用で、例えばラジアルタイヤ、放射線を使って硬くするとか、そういう工業利用が結構あります。半導体の生産にも使われています。そういうものが、昔に比べると広範なところで使われている。中には小柴さんの加速機とかもありますし。あるいは核融合の研究とか。

だから、原子力発電のことばかり質問すると、そういう残りの部分の話、その意識が見えないというご指摘ですよ。

—— そうですね。原子力は、もっと広いと思うのです。

(木村) ただ、これは「エネルギーと原子力に関するアンケート」だから、少し入れにくいところはあるのですよ。

あと、この時期に、「利用、利用」っていうのが嫌がられているのは結構あります。放射線の分野で特に大きく言われていて、放射線利用を前面に押し出して、リスクを隠すなんて何たること、というのは、割と言われていることがあって、あまり安易にできないところも実はあるなと思っているのですけど。

—— 放射線利用の人たちにしてみれば、福島事故と同列に扱われたくないから、あまり触らないでよというかもしれませんね。

(木村) そうなのですよ。

あとは、どういう質問文で聞くかというのが分からないと、難しいのですよね。案がないと。どういう質問文にして、何を回答するのか、です。

—— Q8 の質問は、まさに今 12 の政党が選挙でいろいろ言っている話に直結しますね。

(木村) 本当はこれは、30 年後に原子力をなくすことについてどう思いますか、にしようと思ったのです。だけど、アンケートを実施するのは選挙の後ではないですか。だから、自民党が大勝ちして、そんなのなかったことにしますと言いだした後にこれをやったら、

馬鹿みたいな質問になるねということで、やめたのですよね。それで、代わりに何を入れようかということで、Q8になっているのです。

—— 私は、Q8はこのままでいい気がする。

—— 私は、本調査票（F2-5）の Q19、「20年後の日本全体で使う電力の消費量はどのように変化していると思いますか」という質問は、考えるきっかけにもなるし、いいと思いますけど。

今、いろいろなことを言われているのではないですか。新エネルギーに全部シフトしたらどうだとか、原発は全部廃止とか。でも、実際に自分の生活は電化製品だらけだったりとか。いくらそれが節電設計になっているとしても、原発事故直後はすごく節電、節電って言って、あちこちで電気をとめたりしましたけれども、今は元に戻ってしまっていて。テレビの通販番組を見ている、電化製品をずらっと売っていますよね。そういうのを見ると、「どうなの？」と私も思うのですけど。

原発反対と言っている人も、そうでない人も、こういう問題は、自分のライフスタイルも含めて振り返る問題になるのではないかなと思いました。

—— でも、本調査票では人選しないでしょう。

（竹中） 本調査票の中のこの問題を、別紙調査票に入れたらどうか、という話です。

（木村） 本調査票では人選しないです。だから、Q19を入れるとしたら、別紙調査票の中のどれかとチェンジするのです。代替案ということになりますね。

—— 人選するのは別紙のほうですよ。

（木村） はい。そして、フォーラムをするときに、我々がデータとして持てるのは別紙なのですね。本調査は、マクロデータはあるのですけれども、個別のデータは、別紙で見えないので。

ですから、フォーラム開始前に、我々のほうで別紙調査票をあらかじめ見て、ああ、こういう人たちだな、というのを把握した上で接したほうがいいと思うのですが、そのときに、どういう情報を知っておきたいか。知りたい情報は別紙の中に入れておかないと見れないということになります。

—— でも、Q19を聞くことで、人選で何か変化があるのですか。

(木村) おそらく、人選にはそもそも、Q6 ぐらいしか使えないと思うのですね。

関心がない人はこれを書いて送ってくれないから、Q5 はたぶん要らない。関心がない人は来ないのであれば、「関心がある」「どちらかといえば関心がある」に丸がつく人しか送ってこないのも、もしかすると Q5 は要らないのではないかな。

あと、前回もありましたけれども、男女と年齢で分けていくと、10 人なんてあつという間に埋まってしまうので。例えば、男女の 2 分割、年齢も 2 分割にして、もう 1 つ基準を入れると、それで 8 通り ($2 \times 2 \times 2$) なので、それでほぼ終わりなのですよ。

そうすると、結局のところ Q6 (利用) を取るか、Q8 (経済発展) を取るかという話になりますが、Q6 を取ることになると思うのです。Q6 をとって、「利用していくべき」「やめるべき」「どちらともいえない」の 3 つぐらいに分けて、そうするとそれで 12 通りになるので、その中から適当にチョイスして 10 人にすると。そのくらいになるのかなという気がしています。

—— Q8 は、先日、何が問題になっていたのですか。

(木村) この前は、個人のライフスタイルを聞くような設問がほしいと。

—— そうですね。だけどその後、個人のライフスタイルは、考えと実践が違うかもしれないということで、ライフスタイルを聞いても仕方ないのではという話になりましたよね。

—— そのライフスタイルというのは、Q19 がその部分ですよ。

(木村) 確かに、Q19 はライフスタイルの質問ですね。

—— でも、それによって、選ばれる人がそんなに変わるのかなという感じがします。

—— そうですね。Q5、6、7 までは割とはっきりと答えが自分の中で出てきやすいのだけど、Q8 だけ、あまり答えがはっきり出てこないなと思うのです。どうしてかというところ、原子力発電がなくても経済的に発展できるかというところで、では他に何があれば経済発展できるのかなという思いが、新エネルギーしか思いつかないので。それで発展できるのかな、というのがあるから、あまり答えが自分ではっきり出てこないなと思って。

もっと簡単に答えが、いいとか悪いとかははっきり出てくる設問に変えたほうがいいかな、という気はするのですけど。

(竹中) 質問なのですけど、年齢と性別と Q6 を基準に分類した場合、同じカテゴリーに何人かいるわけですよ。その何人かから 1 人を選ぶのは、完全な抽選なのですか。それ

とも、他の質問を使って選ぶということにするのですか。

(木村) それはありえます。

(竹中) ならば、Q6と答えが変わるような質問が、他のところであったほうがいいはずですよ。

—— 本調査票にない質問は駄目なのですよ。それが難しい。

(木村) そうなのです。もしくは本調査側に、新たに設問を提案するという形でも構わない。なぜなら、半ページ分スペースが残っているのです。半ページで収まるものなら提案できます。

—— 国のエネルギー政策でも非常に高い省エネ目標を掲げているのですよね。だけど、あの数字を海外で話をすると、会場で嘲笑がもれるのです。要するに、ほとんどの人が、そんなことできつくないと思っている。これだけ便利な生活に浸っていて、原始生活に戻るみたいな、そんなライフスタイルなんて無理に決まっているよ。日本の政府も、あの省エネ目標をどうやって達成するかというのは、精神論しかないのですよね。精神論だけなのです。具体策は何もないのです。

—— 根性論ですか。我慢するとか。

—— 寒いときには、どこか暖かいところに全員集まって、暖房消すとか。

—— 日本人は、去年は少なくともそれを実現してしまったのですよね。これはすごいことだと思うのだけど。ああいうときには、火事場のばか力ではないけれども、意外とやるものだなとは思いますがけれども。だけど、これからずっとそういうライフスタイルをできるのか。そういうライフスタイルのことを直接的に聞くような設問があると、興味深いですね。

—— 例えば、震災後の省エネ生活を、何年ぐらい続けられますか、とか。もうできません。2度と嫌です。延々します。

(竹中) 単純に、節電したかどうか聞きたいですよ。

—— 気にはしたけど、実際したかどうかは分からないですよ。節電しなければ、とは

思ったけど。

—— むしろ（節電したのは）企業ではないですか。皆さんは節電しましたか？

—— したつもりだけど、電気料金を見ると、あまりなっていない。したつもりだったのに、電気料金を見たら全然減っていない。

—— 正直言って、我が家も、電気料金見ると、あまり変わってないなど。

—— できない節電はしていないのに、どこも停電していない世の中を見ているから、どういう仕組みになっているのかなと思うから、Q8で経済的に発展できますかと言われたときに、できるのかもしれないなと思ってしまうのですよ。

—— やはり企業がするのですよ。

—— だから、本当に企業が苦勞しているのだと思うのですよ。

—— そう、ほとんど企業なのですよ。データで歴然として出ています。

—— 企業は数字で目標立てて、ガリガリでやるので。もう蛍光灯抜いちやいますからね。はっきり減るのですよ。

—— だから、やはりそこではライフスタイルは分からないですよ。

—— そういうことだよ。そうかな、と思った。すごく節電した人もいると思うけれども、思いのほか停電しなかったりするから、人間って、自分を少しずつ緩めているはず。以前より節電していると思うのだけど、続いてもいると思うのだけど、許容範囲がかなり高くなって続けていると思う。

—— LEDは？

—— そうですね。LEDは買ったかもしれないね。

—— 私は5、6年前に、使えるところは全部LEDに変えましたよ。

—— でも庶民は、安くなるのを待っているのですよ。テレビも何年か経つと安くなった

ので、LED ももう少し安くなったら。やはりそういう人のほうが多い。でも今回は、思い切って買った人は多いと思いますよ。

(木村) このアンケートの中で、むしろ、なくてもいいと思う質問はどれですか。

—— Q5 をあえて、聞かなくても。

—— Q5 は外してもいいのではないですか。

—— そう。その下に、利用する・やめる、安心・不安があるから。

—— Q6、7 でかなり分かるので、Q5 の場所にライフスタイルに関わるものを入れてもいいかもしれませんね。本調査の Q19 でもいいかもしれませんけど。

—— 20 年後のことを聞いても、電力消費していると、私は思っちゃうな。

—— 20 年後のことはよく分からないな。

—— やはり「20 年後」が強烈で。

—— 「何年後」と言わずに聞いている質問はないかな。ないみたいですね。

(木村) さて、今 1 時間半ぐらいですけれども、少し休憩しますか。5 分くらい休憩しましょう。

(休憩)

(木村) では後半始めます。後半と言っても 1 時間ちょっとしかないので、さくさく行きたいと思います。

ということで、アンケートですけれども、今出ているところでは、Q5 は外してもいいのではないかという話です。あとは、例えば Q19 を入れてみるのもひとつの手ではないかという話。それに関係して出てきたのが、震災後の省エネ生活を続けるとして、どのくらい続けられますかという設問。単に、震災後に省エネをしましたかという設問。あとは、休憩中のお話の中で、電気代がどのくらい上がってもいいか、という質問はどうでしょうかという意見が出てきています。あとは、質問のスタイルが私には見えていないのですが、原子力の広がり聞くような設問を入れてはどうかという意見もありました。

選択方法としては、市民については、年齢、性別と、おそらく原子力の利用が中心的な話になると思います。その他の設問は、ひとつの階層にたくさん候補者がいたときに、1名に絞り込む場合に利用できるということだと思います。

そういうことを念頭において、これを作り直す必要があるかなと思います。実は裏表なので、表のほうでも、これは別に要らないというのがあれば。例えば Q3、Q4 は裏でもいいなら裏面に回して、表に Q6 を持ってくる。そうすると、表だけ書いて、裏を書かないでそのまま出してしまった人でも、場合分けはできる。

—— 確かに、こちらだけ書いて、こちらを忘れる可能性がありますね。

—— それはいいかもしれないですね。

(木村) そうしたほうがいいですか。アンケート屋としては気になっているところなのです。

Q3、Q4 は、選択には使わないでしょうか。その辺をお聞きしたい。

—— 他の項目がまったく同じであれば、専業主婦と学生で分ける場合はありますよね。

—— Q3 よりも Q4 のほうが優先順位が高いような気がしますね。

(木村) Q3 は要らないですか。

—— でも、文系と理系で違うとおっしゃっていましたよね。

(木村) 私は、かなり違うと思うのですが。ただ、理系の人って、%で言うと、5%くらいしかいないので。

—— そうなのですか。

(木村) はい。数で見ると、大学で理系で卒業している人は、全人口の5%くらいしかいないのですよ。調査結果は、そんなものでしたよね。

—— 即答はできないですけど、そのくらいです。

(2011年度調査：大学(文系)約24%、大学院(文系)約1%、大学(理系)約8%、大学院(理系)約2%)

—— パッと考えて、やはり文系が多いですね。

(木村) 文系の大学が多いです。

—— 経済学部もそうなのでしょう。

(木村) はい。理系は少ないのです。大学院なんて、1、2%しかいないですし。

(竹中) そうすると必要かどうかは難しいですね。

(木村) むしろ、大学卒か高卒かとかで、少し差がでる可能性はあります。ただ、これは年齢との相関があまりに高く、昔の人は高卒が多いけど、今は大卒が多いとか、そういうことがあるので、年齢と絡めて考えないと意味がない可能性はあります。

ちなみに、どちらかと言えば自分は文系だという人はどのくらいいますか。

—— それは学校で勉強したことではなくて？

(木村) それでもいいです。

—— 学校で勉強したことでもなくとも、文系だと思います。

—— 分からない。どちらでもないかもしれない。

(木村) そういう聞き方を1回やったことがあるのですが、それでもやはり理系のほうが少ないですね。

—— では、この会議体は特殊なのですね。

(木村) 工学部ですから。

(竹中) 文系で手を挙げたい気持ちはありました。

—— 理系の人が文系っぽい要素を持つことはありうると思うのだけど、文系の人が理系の要素を持つことは不可能だと思うのですよね。

—— 知識としてね。

—— いや、体質的に。

—— 文系出身でも、金融関係に就職すると、もう今は金融なんていうのはコンピュータ抜きでは仕事できませんから、そうすると、理系の人よりも IT に精通している文系の人も、金融業界には結構多いのです。

—— だから、大学というよりも、むしろ勤めている分野がどういう分野か。そちらのほうが圧倒的に長いですし。

(木村) そうしたら Q4 (職業) を表に置くことにして、Q3 は後にしましょうか。

実は、原子力学会員には、このほかに専門分野も聞くことにしていて、それは必要な情報なのですね。もしかすると、分野で分ける可能性もあるので。それを含めて、さらに利用、原子力の利用 (Q6) を表にすると。

—— Q5 の代わりに入れる質問、先ほど木村先生がいくつか例示をされていた中で、私は、皆が分かりやすいという意味で、「震災直後の省エネ生活をどの程度送れるか」がいいと思います。1年ぐらいだったら我慢できる。あるいは、せいぜい数年だと。一生それが続いてもいいと。

—— 今はやっていないとか。

—— もう嫌だとか、やらないとか。そういうもので、ライフスタイルのイメージを把握できるかもしれませんね。

—— それか、電気代ですよ。今後このまま原子力発電が動かないとしたら、あなたは電気代がどのくらい上がることまでなら許せるか。

—— 反対派ばかりの集会で、私とその電気代の話をしたら、反対派の人は、やはり電気代が上がるのを嫌がっていましたよ。

—— それはそうですよ。

—— 反原発と、電気料金が上がるということがリンクしないわけですよ。

—— いや、しているけど、嫌なのですよ。

—— 認識していない。それで、再生可能でできる、できると反対派の方は言うわけですね。皆さん、再生可能を増やしたドイツが、電気代が 1.5 倍に上がったのをご存知ですかと聞いたら、皆、「え？」って言うわけです。

—— 今、ドイツは上がりすぎてしまって、問題になっていますよね。

—— だから、そういう認識がなくて反対しているという人が結構多いなと思って、びっくりしました。

—— 電気代のほうが、現実味がありますよね。

—— だって、すでに多少上がっていますよね。

—— 再生可能は電気代がものすごく上がりますよ。その負担は、税金でやろうとも、電気代でやろうとも、皆消費者に返ってきて、むしろ所得の低い人の負担のほうが高くなる傾向があるのですよね。だから、弱者に対するダメージが高い。

(木村) 電気代がどのくらい上がってもいいですか、を聞くとしたら、どういう設問ですか。

その前に、結局、Q3 は必要ですか。

—— やめましょうよ。

(木村) 要らない。では、Q3 も削除。

—— Q5 も削除。

(木村) Q5 も削除。

(竹中) Q7 は置いておくのですか。

(木村) Q7 は置いておいてもいいと思うのですけれども。Q7、8 を置いておいて、そうすると 2 問空くから。それで、Q9 はあっても大丈夫ですか。

(竹中) 面白いと思います。

—— 「特に印象は持っていない」を入れるのですね。

—— メンバー選定に直接関係はないかもしれないけれども、参考情報として、Q9はあったほうが良いと思います。

(木村) 聞いておいたほうが良いですね。

—— Q9は専門家には聞かないのですか。

(木村) 両方に聞きます。

安心・不安と、専門家への印象と、あと、Q8はどうしますか。変えますか。

—— あっても良いと思います。

(木村) では、この経済発展も入れておきましょうか。

その他2問入るので、その2問としては、「省エネ生活を続けるとして、どのくらい続けられるか」というのと、「電気代がどのくらい上がっていいか」という、その2問を提案をして、社会調査グループに作ってもらいましょうか。電気代の上昇については、どういう選択肢になるか私の中ではイメージがついていないですけれども、値段も言ったほうが良いですか。それとも、今の何倍以上とか、割合のほうが良いですか。

—— 2000円アップとかのほうが良いか、2倍とか3倍のほうが良いか。

—— 電気代アップは、どのくらいの範囲なら許せますか。3000円アップ、5000円アップとか。

(木村) そっちのほうが良いですか。

—— そのほうが答えやすい？

—— うん、%よりね。

(木村) 「上がってほしくない」、「1000円アップ」、とかでしょうか。上がってほしくないと言ったら駄目かな。

(竹中) これは、原子力とリンクさせないでいいのですか。原子力を止めることとリンクさせないで質問するのですか。

—— いや、止めた場合。

—— 減らす場合、と言わないとまずいのではないですか。

—— だって、減らしても電気代は上がるのですよね。

—— そうです。原子力が 25%でも、現在比 60%アップです。

(木村) 上がってほしくない、はちょっと。0 円にしますか。

(竹中) 原子力がなくなるなら、いくらでも OK。

—— それもあってもいいね。

(木村) 5000 円アップ以上。

—— 絶対値にすると、今どのくらい使っているかによるから、%のほうがいいのではないですか。

(木村) %だと、答えにくいという話が。

—— %は、あまり実感がわからないのですよ。

—— 自分が実際にいくら使っているか認識していない人もたくさんいると思うので。

—— 我が家はオール電化だから、電気代に全部しわ寄せされて、毎月 2 万円払っています。

(木村) 普通、1 ヶ月の電気代はどのくらいですか。

(竹中) 平均を見ればいいですよ。(スマートフォンで調査)

—— うちの 1 万ちょっとです。1 万ちょっとで、収入が、多いときは 7000 円くらい、少

ないときは 4000 円くらいです。

—— ガス代はいくらくらいですか。

—— ガス代は 0 です。太陽光にしているから。

—— 売上げがあるということは、電気代はただですか。

—— ただではないです。冬は結構かかりますよ。

—— かかるというのは、太陽光発電を引いて、1 万かかるということですか。

—— そう。太陽光発電は、別途入ってくるのです。差し引きすると、1 万くらいです。

—— 夏はプラスですね。

—— 5 月が一番プラスになりますね。

(木村) まあ、その辺りのお話は、後でお願いしたいと思います (笑)。

—— 経済の話題になると、こんなに夢中になるのですよ。1000 円、2000 円の話でも。

(木村) そうですね。だからここの刻みを、1000 円、3000 円、5000 円とかにしちゃうと、少し違うなという気がするのですね。

(竹中) 電気代について、今、少し調べてみたのですが、世帯ごとに結構変わるのですが、世帯 1 人の場合、約 5000 円です。2 人から 5 人までが、8000~1 万 2000 円が平均らしいですね。

(木村) ということは、3000 円、5000 円、1 万円でしょうか。

—— 1000 円は？

—— それくらいだと、季節の変動の中に入ってしまうですね。

—— ああ、そうか。

(木村) 1万円アップがありえるということですね。

では、やはりこのくらいでしょうか。0円、上がるの嫌だというのも入れて。

—— 「1ヶ月世帯あたり」ですね。

(木村) まあ、これは社会調査の人たちに聞いてみましょう。以下を追加したいということ。

—— 経済感覚を聞いてみるのは面白いですね。

—— あとは、単純な間違いだと思いますけど、Q8の2行目、「それとも発展できないと思いますか」の「は」はいらぬですね。

—— あと、Q7とQ8は、「右の選択肢うち」で、「の」が抜けていますね。

(木村) 金曜までに直すのを忘れるかもしれないので、金曜日にも言ってください。では、これは代替案として言うておきます。

—— 職業を分類する必要はないのですか。

(木村) どうしますか。あまり選択肢が多いとな、と思っているのですけど。

—— また迷いますよね。じゃあ、いいか。

(木村) 今までの分類なので、あまり変えないほうが。

—— 家事手伝いを、家族従業というのですか。

(木村) これは、おそらく国が行なったアンケートを参考にしています。

—— 主婦ではなくて、仕事をしていない人のことですか。

(木村) でも、無職がありますからね。

—— どう分けるのですか。

—— 家事手伝いというのは、家族でお店をやっている人とか、そういうことを想定しているのかな。

—— でも、それは自営業につけるのではないですか。

—— 家事手伝いは、独身で、家族と一緒に住んでいて、小遣いをもらったりして、特に仕事はしない人、だと思います。

—— 自営業というのは、自分がやっているわけだ。事業主。

(木村) 2番は、金をもらっているニートですね。金をもらっていなければ無職。まあ、よく分からないですね。

—— 花嫁修業とか、お稽古事とか。

—— 昔はそうだったよね。

(木村) 割と2とつけてくる人も多いです。

—— 家事手伝いというと、ブラブラ家でしている人のことは、昔は家事手伝いって、よく書きましたね。

—— 花嫁修業をしているお嫁入り前の女の人が家事手伝いだと思いますけど。

—— 国が使っているというと、家事手伝いというのは、先ほどおっしゃった、店の手伝いをしている、仕事をしてもらっている人のイメージですよ。

—— ニートは無職ですよ。

(木村) ニートは手伝ってもいないのか。

—— でも、花嫁修業をしている人は2番だと思うけど。

(木村) ここは、変えにくいので、そのままということをお願いします。

では、次にいきたいと思います。本当は、どんな文面で募集するかを考えなければいけ

ないのですけれども、少し先送りします。今日こそ竹中君に話をしてもらわないと。

なので、次にいきます。「フォーラムの内容と段取りの決定」です。まず、考えなければいけないのは、フォーラムの日取り、シンポジウムの日取りです。日取りというのは、要は何月何日かということです。何曜日にやるか、1 回何時間で、どの時間帯か。それから、各回の目標をどう設定するか。各回をどうスケジュールするか。

まずは何曜日の何時から何時までを 1 回にするか、案を皆さんのほうから出してもらえばと思いますけれども、いかがでしょう。

—— 社会人の方が参加することを考えたら、土日でしょうね。

—— 平日にしてしまうと、遅い時間帯がいいという方の応募が、少ないとは思いますが、あった場合に、まったくチョイスできなくなってしまうので。土日のほうがいいですね。

(木村) 曜日はやはり土日でしょうか。

—— 学生も難しいか。平日でいいのは、主婦だけか。

—— それと退職した方。

—— でも、主婦でも、子供がいるとしたら、平日はでにくいかもしれない。

(木村) 土日どちらかに固定していたほうがいいですね。どちらのほうがいいですか。

—— 主婦はどちらがいいですか。

—— 主婦ならどちらでも同じですよ。

(竹中) 社会人はどうですか。土曜のほうが、出やすいですか。

—— 感覚的には、土曜日のほうがいいですね。まだ日曜日があるから。

—— 私もそう思う。明日休めると思ったら頑張れる。

(木村) では、土曜日にしましょう。

—— 土曜の午後。

(木村) でしょうか。

—— あまり遅くないほうがいいかも。

—— でも午前中からは嫌ですよ。

(木村) 午前中からは嫌ですね。

—— いや、終わる時間をあまり遅くしないほうがいいという意味です。

—— 1回につき何時間かと関係ありますね。だから、午後の早い時間でしょうか。土曜日お休みの人だったら、朝ゆっくりめに起きて、朝昼兼用のご飯を食べて、12時半くらいからでも大丈夫かな。

—— やはり、13時から16時ぐらいがいいと思いますけど。

—— でも初回は13時から17時とかね。初回は時間かかる気がするのですよ。どう考えても。

(木村) 自己紹介して、説明したり。確かに初回はかかりますね。

—— だから、そういう内容の濃さと、あとは休憩の時間のとり方ですよ。

—— 基本は13時から16時だけど、初回だけ13時から17時になる可能性もありますよね、プログラムによっては。

—— でも、最初にアナウンスした時間より伸びると困る人もいるから、それだったら、初回は17時とアナウンスしたほうがいいですよ。

(木村) やはり、そのくらいかかりますよね。

—— やはり時間に余裕を見ておかないと、休憩時間もとりづらいし、そこで知り合った人同士でお話している余裕もないし。時間が必要でしょうね。

—— ということは、16時でないほうがいいということですか。

—— ううん。3時間は必要だということ。3時間が長いと普通の人は思うかもしれないけど、休憩挟んで、自由な話題も少し入れられるかな、ということで3時間ぐらいは必要。2時間だと本当にぎゅうぎゅうですよ。

(木村) 今日もう2時間越えていますからね。

—— 休憩込み、みたいに一言入れてあげるといいかもしれないですね。

—— 最初は様子に分からなくても、話が佳境に入って、いろいろ本当にコミュニケーションができるようになってくると、2時間というのも本当にあつという間だし、話し足りないという感じが残りますよね。

(木村) 議論の時間は3時間で、15分休憩を入れて、15分くらいは遅れることを想定して、16時半にしておくという手はあります。

(竹中) どうなのですか。やはり最初に明示した時間を守ったほうがいいのですか。

(木村) 基本的に、いい会議と呼ばれるのは、時間を守る会議です。

—— 16時半のほうが17時よりも、なんとなくいいですね。17時というと、その後がしんどい。16時半だと主婦の人でも大丈夫でしょうし。

(木村) 初回の後に懇親会みたいのを企画しておいて、少し遅くまでやるとか。でも初回と最終回の両方懇親会は嫌ですよ。

—— まあ最終回は、流れで。

—— 最終回というのは、シンポジウムの日ですか。それとも5回目の日ですか。

(木村) 5回目です。5回中、2回も飲み会入れるのは、最初の時点では少し嫌だろうから。

—— 1回目はアイスブレイキングという意味でやるのですか。

(木村) 会が終わった後に。17時までにしておいて、そのまま飲み屋にいくなり、会場

でそのままデリバリーでやるなり、というのを考えるのはありかなと思うのですが。

そういうのを入れておくと、初回が少し伸びても、そちらで調整が効くと。まあ、参加される方は、ですけれども。

それ以降の回は、13時～16時半にすると、真ん中に15分休憩を入れても、1時間半、1時間半が確実に確保できる。そのくらいがいいでしょうか。土曜の午後丸々ですけれどもね。16時ならまだもう1回いけるなって感じだけど、16時半って言われた瞬間に、丸々だなって感じがしますね。

—— でも、17時と言われるよりはましです。

(木村) ですよ。では、16時半にしておきましょう。そうすると、1回につき何時間かも決まったわけですね。1回3時間半、休憩込み、ということになります。

そして、各回の目標をどう設定するかということに関しては、実は、どんな文面で募集するかにも関わってくるのですが、募集時にどこまで書きますか。

—— 毎回の目標は書かなくていいと思うのですよね。1回目終わって見ないと、2回目は、私はあまり設計できない気がするのですよ。

—— 予定していても、変わってしまうかもしれないですよ。

—— そう。大まかな5回を計画はしておいても、1回目のメンバーと、出た発言によって、もしかしたら方向を変えなければいけないことがあるのではないかという気がするのですよね。

(木村) そうすると、各回のタイトルくらいは決めておいて、スケジュールは後で議論すればいい、くらいにしましょうか。そうすると、タイトルくらいは決めたいと思うのですが。それが終わったら、竹中君の発表に移りたいと思います。

—— 1番目と5番目は決まっていますよね。

(木村) 1番目は、何と書きましょうか。

—— オリエンテーション。

—— そうですね。原子カムラについて、どのように感じているか、思っているかということを書いてもらうだけで、いろいろな意見が出てきますよね。それをどういう形でやる

かは別にして。

1回目で見えてきた壁とかいろいろなものを、どうすれば解決できるのか。どのようにすれば壁を低くできるのか。みたいな議論が2回目ではないでしょうか。

具体的にするのは、3回目かもしれない。具体的に、どういうことがあれば、障害を低くしていけるのか。

—— 最初に、原子力と関係ない話はするかしらないか、いう話がありましたよね。それをどこに入れるかというのがよく分からないんだけど、今おっしゃったように、原子力ムラについての話をしても、即それを越えることではなくて、その中で、市民はこう思っている、ムラびとはこう思っているというのが何か突出してきたら、そこからまたテーマをひとつ拾って、次に何かするというほうが、理解が深まって、いいのではないのでしょうか。すぐ、越えるといっても案が出てこないだろうし。何が自分たちにとって問題点なのか、課題点なのか、すぐ出てこないかもしれないし。

—— 社会的リアリティの共有は必要かどうかということですよ。

—— さっきの協働作業みたいな。

—— そう。やるとしたら、たぶん、2回目か、1回目の後半かどちらかですよ。私は1回目かなと思ったのだけど。

—— ちょっと顔見知りになって、ちょっと動いてみよう。

—— だから、情報共有の部分を、1回目に、何か作業とかをしながらやるのかなと思ったのです。もし2グループでやったら、グループのメンバーを変えて2回やるとか。そうすると全員と知り合うわけでしょう。

—— 例えば、原子力と関係なしに、生活スタイルをどう変えていったら省エネができるのか、みたいなものを共通テーマにしてグループ討議をして。できると思うグループ、できないと思うグループに分けるとか。

—— ディベートみたいなのもいいですよ。

—— できるグループ、できないと思うグループのディベート？

—— それか、自分ができると思っていたら、できないと思う立場になって議論するとか。

—— それは面白いですね。

—— 自分の意見はひとまずおいて、違う意見を考えるきっかけとして。

—— 5人か10人で、相手をやっつけるための論理を議論して、その代表同士でディベートする。

—— それを見て、あなたはどう思ったかと。内容ではなくて、ディベートのやり方などを見て、あなたはどう思ったか、という話をするといいかもしれない。

(竹中) 初日に原子力の話をする、身構えませんか。そうでもないですか。

(木村) 私は、オリエンテーションで1日使ってもいいかなと思っています。それこそ、普段どういう生活をしているのかという、自分の生活紹介。ただ、議事録にしにくいですけどもね。生々しい生活紹介とか、普段何を考えているのかとか。

—— 何を大事にしているのかとか。

(木村) 初めに、そういうのがあってもいいかなと思うのですよね。

—— それが一番、その人のことが見えるかもしれませんね。

—— ライフスタイルとか、私のこだわりとか。

(木村) でも、答えろと言われたら難しい話題でもありますね。

—— (笑) 何もこだわってません、とか。

—— 食べることとか、寝ることとか、仕事とか、家族関係とか、いくつかテーマを作ってあげると、答えやすいかもしれませんね。価値観が出てきますよね。

(木村) でも、テーマを作ってしまうと、今度はテーマでしばられてしまうから。

—— フリートークでね。おしゃれの話をする人もいれば、家族とのコミュニケーションについて話す人もいるだろうし。

(木村) そのオリエンテーションをやると、あっという間に半分は終わりますよね。本当は1日終わっちゃうかもしれないけど。やはり初回は4時間とって、オリエンテーションでそういった話をして。

—— それがアイスブレイキングになるかな。

(木村) これはアイスブレイキングになりますね。そして、後半はやはり少し原子力の話をしたほうがいいですね。

—— そうしないと、2回目以降につながらないのではないかと。やはり、テーマが常に頭にあったほうがいいかな、という気がします。1回目に参加者の中で差が出てくると、2回目からそれをどうするかという話が、よりしやすい。

—— それと、1回目に原子力のことについて、皆で共有しておくとか、人の意見を聞いておくと、次は1ヵ月後ですけど、その間に、自分でも人の意見を聞いたりとか、考える時間も出てくるから。やはり何にも触れないで次というと、また一からですからね。

—— 1回目から原子力の話題に触れないほうがいいと思う理由は何ですか。

(竹中) いや、私だったら全然いいんですけど、何か、

—— それだけではよくないということですね。

(竹中) そうですね。オリエンテーションでいきなり原子力に入ると、専門家は専門家、みたいな立場にいきなり行きやすいかなと思ったので。

そういう意味では、協働作業というのも、私の中では少しやりすぎかな、という感じなのですよ。

(木村) 協働作業というのは、どういうイメージをしていますか。

(竹中) 一緒に何かをやるのですよね。

(木村) 協働作業というのは、単に、意見をグループでまとめてみましょうぐらいの、ワークショップで模造紙でやっているようなものですね。

—— そうです。

(木村) それくらいのイメージなのですが、それでもやりすぎですか。

意見を冷静にまとめる役を参加者がやることで、いろいろな人の意見を聞けるとか、自分の意見も整理されるとか、相対化ができるとか、そういうことをやりたいということですよ。

—— 協働作業というけど、イコールファシリテーションの練習とか、試しとか、そういうイメージです。

(木村) そのくらいのことなのだけど、それもまずいかな。

(竹中) いや、初日にそこまでできますか。

(木村) それは確かにありますね。「ムラについてどう思っているか」は難しいかもしれないけれども、単に「原子力についてどう思っているか」とか。でも、原子力についてどう思っているか、の意見共有は、協働作業にならないような気がしますね。

—— 私は、単純に、原子カムラという言葉がよく使われるけれども、あなたは何を感じているかとか、どう思っているかとか、どうしてそう思うかという意見を出し合うと、ものすごい意見が出るのではないかと、という気がするのですよね。

—— 20人いるわけでしょう。今みたいな意見を、例えば1人5分しゃべると、それだけで100分。

(竹中) そうなのですよ。2時間ぐらいかかってしまう。

—— だから、協働作業に至らないと思う。それぞれの意識を、市民、それから原子力学会の人、両方の全員にしゃべってもらって、それを我々のほうで紙に書いて、模造紙に貼ってグルーピングする。それが初日ではないでしょうか。

(竹中) それから、協働作業をする場合、5人ぐらいのグループになるわけですよ。そうすると、1人1人の原子力に対する意見の特徴が見えない。つまり、5人のまとめは見えるのだけど、個別のものは見えない。5人の1人1人の特徴が見えたほうがいいのかと思うのですが。

—— グループワークをすれば、この人が何と言ったかで分かりますよね。

(竹中) グループ内の 5 人のことしか分からないですよ。

—— 途中でグループを変えればいいのではないですか。

—— メンバーを変えるし、最後にそれこそ発表タイムを作ってもいいのではないですか。

(竹中) そのグループの発表を聞いたときに、そのグループの中の誰がその意見を言ったのかが分からないと、1 人 1 人の特徴が分からない気がするのですよね。

—— そのグループに入っていない人からするとね。

—— 1 人 1 人の特徴が分かることが必要でしょうか。

—— 私はむしろ、市民の人の立場と原子カムラの人の立場が分かればいいと思うから、A さんが何と言ったか、B さんが何と言ったかよりも、市民の側はどう見ているのか、原子力学会の方たちがそれを聞くことで、ああ、市民はそう思っているのだなと分かればいいかなと思ったのですよ。

—— 個人の意見はなくてもいいかなと思って。何回かやれば、そのうちまた分かってくるので。

(竹中) ちなみに、今の話を聞いていて思ったのが、原子カムラの人たちで、グループ作業をやるのですか。

—— 混ぜてですよ。

—— ミックスで、10 人くらいの 2 グループでやってもいいよね。

(木村) 最初からミックスして協働作業をしたほうがいいですか。それとも、個人で意見を言ったほうがいいですか。全員意見を言って共有してから、次回ぐらいからグループ作業がいいですか。それとも 1 回目でもうグループ作業をやってしまったほうがいいですか。

—— 私はその「協働作業」というのがいいと思うから、最初からがいいかなと。別にあ

まり抵抗がないかなと思ったのですけど。

—— 私も最初からがいいかな。

—— 確かに、メリット、デメリットはあると思います。なんとなく 1 人で皆の前で、私はこう思いますと言いつらい人も、グループ作業だと言いやすい。

—— そう、慣れないと（全員の前では）言えないですよ。

—— そう。グループ作業だと、その中で少しずつ自分の意見を言いながら、皆と話をしながら、だんだん意見が引き出せるというメリットがありますよね。

確かに、さっき竹中君が言ったように、グループ作業になると、グループに参加していない人から見えづらいというデメリットもあると思うのだけど。両方あると思いますね。

—— グループでやっていて、グループで発表すると、自分はこう言ったのに、その意見は入っていないという不満はどこかで出てくる可能性はありますね。

—— 私は、むしろそこを狙いだと思います。

—— それをどこかで引き出せたらいいなと思っているのですよ。

—— でも結果的に、ポストイットに自分がどう思うかを、まずありったけ書き出すわけですよ。それでグルーピングをすると、多少言葉のニュアンスは違うけれども、だいたいプラスのイメージとか、マイナスのイメージとか、こういう希望があるとか、そういうものに分かれるでしょう。

—— やはり自分の意見はちゃんと書くということがポイントですよ。そうすれば残るわけだから。

—— そう。それで、同じような意見も出てくるから、当然それは重なるわけだし。

—— そのときに、原子カムラの人は、そう言われているということに対して、自分がどう思うかを書くと。

—— そうすると、もしかしたら人によっては、いずれそう言われなくなるようにしたいから、こうしたい、という意見もあるかもしれないし。それはやってみると、いろいろ出

ますよね。

—— 今のイメージだと、ファシリテーションは誰がするのですか。

—— そのグループの誰か。

—— ですよね。でも、最初からうまくいくとは限らないから、誰かつくという感じですか。(参加者のファシリテーションをフォローするファシリテーターがいる)

—— もちろん。

—— 自分はこう思っているのに、グループの意見には必ずしもそれが反映できないというのは、まさに社会的リアリティ。それは、ほぼ全員に共通して生まれる思いなのです。それが、私が冒頭お話しした社会的リアリティの共有で。

では、どのように自分の意見を出すと、グループの意見として自分の意見が通るか、それを経験することはすごく面白いというか、有意義なことで。両方にとって有意義な実験になるような気がします。

—— 自分の思っていることが汲み取れないという局面を、汲み取るべきを 1 回作ってあげると、学習効果みたいなものがあるかもしれない。

—— それを汲み取るのがまさにファシリテーターの役割です。最初のころにそれをやることには非常に意味があって。そのプロセスを経験して、それぞれがそういう問題に対して、どう思ったか。それをまた 2 回目、3 回目で議論して。

—— 私は、そういう体験は 5 回すればいいと思うのですよ。すればするほど、自分の中でも変化が、自分の中で見えてくる。

—— それは面白いですね。

—— 毎回何か体験するようなことを積み重ねていくと、壁は低くできるのだということ、ご自身が分かるのではないかと。

—— お互いね。

—— 単に言いあっているだけではなく。

—— 回数を重ねないと、ファシリテーションをする人が1人か2人になっちゃいますので、必ず全員に経験させるということが大切ですよ。

—— 役割を変えながらね。

—— そのときのファシリテーションは、うまくできなくてもいいのですよね。要するに、できないという経験を持つということ。

(木村) できない経験を持つのもそうだし、それを通して何を知るか、がさらに大切です。

—— 失敗から何を学ぶか。あ、失敗と言っちゃいけないか。

(木村) 失敗っていうことを学んでも仕方がなくて。でも失敗なりに、誰がどういう意見を持っているということをちゃんと自分で理解していくという体験が大切なので。失敗する、しないという体験よりは、そちらのほうが大切ですね。だからこそファシリテーションを、例えば元気ネットさんがアシストしてくれるということです。だから、うまくいかないときは、そこでアシストしてもらって、というのがいいんだろうなと。ファシリテーションを覚えることがメインではないので。うまくいく、いかないというよりは、そういう立場をやってみると。

—— それで、人の言っていることをきちんと理解すること、伝えることが、難しいけど、すごく大事だということに気づいてもらうと。

—— 耳なのですよ。それが難しいということを経験することが、非常に意義深いのでしょ。ファシリテーションの技術は、1ヶ月くらいカンヅメになって、プロが教育するのですよ。非常に大変なのです。それを勉強することではなくて。

—— そういうことを実感しながら、それぞれの立場の意見が、だんだんお互い理解が進んでいったときに、壁が本当にどうなるか、ということですよ。

(木村) すみません、かなり具体的な中身の議論になってきましたけれども、それは次回以降また改めてのほうがいい気がするのですが、とりいそぎ、タイトルはどうしますか。それとも、タイトルは適当につけておけばいいですか。

—— 3回目とか4回目に、原子力と離れたテーマを。

(木村) そういう話を入れますか。電気の話とか、あとは安全神話をどう思うかとか、そういうテーマでやりますか。

例えば、第1回はムラの話をして、第2回はその続きでムラの課題などについて話すと
して。第3回で省エネとか、第4回で安全神話とか。

(竹中) 5回目はもう決まっているというのは、どういうことですか。

(木村) 5回目はまとめです。

—— 5回目は、この5回を通して、最初に思っていたあなたの原子カムラの壁はどう変わったか、ということですよ。

—— シンポジウムで発表するのでしょうか。それは5回のフォーラムとは別ものでしょうか。
だから5回目は、その発表のまとめをしないといけない。

—— そう。この5回の成果としては何かということを経済的にまとめて、シンポジウム
で発表するということですよ。

(木村) 5回やって、自分たちの中で原子カムラの壁が、どのように変わったかというこ
とです。

—— そう。もし全然変わらなかったら、次年度の5回をどうするかを考えないとけな
い。だから変わっても、変わらなくてもやることはありますよ。

(木村) だから、課題などもまとめることになりますね。

—— それと、今後こういうことがあると、この壁はもっともっと早く低くしていけると
か。市民のほうから原子カムラに入りたいと思うようになるとか。やはりいろいろあるの
ではないかと思うのですけど。

—— それ(市民がムラに入っていくこと)が一番の近道なような気がするけれど。そこ
に何があるかも知らないのですから。

(木村) では、第1回、第5回はこれで決まりで、第2回から第4回は原子力や、それ

に関わる話題について、意見を共有していくみたいな枠組みにしておく。例えば省エネとか、安全神話の話とか、そういうテーマをやります、と書いておけばいいでしょうか。そのくらいにしましょうか。

—— そうですね。第1回も私たちが計画していたようにいかないかもしれないです。もう1回やらなければいけないかもしれないですね。

(木村) そうですね。その場合、次の年度はそういうスケジュールを組まないといけないので。

では、そのくらいの内容が、とりあえず最初の勧誘のときに書く内容ということにします。

スケジュールは、今はいいですね。ちなみに、日を決めたほうがいいのかもしいのですけど、日は直前で決まればいいですね。

では、ようやく、今日決めるべきことはある程度決まりました。

最後に、公開の程度ということで、チャタムハウスルールに近いものを使おうと思っています。チャタムハウスルールとはどういうものか、ウィキペディアから取ってきましたので、参考までにご覧下さい。要は、参加者の顔とか、誰が言ったかは分からないけど、あとの部分は全部公開して、それは皆が自由に使っていいという資料にして出すというようなルールです。基本的には、イギリスで、専門家同士が自由な意見討議をするときに使われています。そのときに、組織を背負ってしまうと自由に意見が言えないので、背負わなくても言えるように、誰が言ったかは全部削除して、こういう意見が出ましたということだけを出していくというようなルールです。自然にいろんなことを言えるように、自由に言えるようにするためのルールです。このルールを準用して、公開していくことで、公開性を担保しようと思っています。この辺りのことも勧誘のときに書こうと思っています。

—— 安心して話してくださいということですよ。

—— 専門家の人が、この会議で、こういうことを言っていたということは、どこでお話しても構わない。

(木村) ただ、誰が言ったかは絶対言ってはいけない。

—— 木村先生が言ったとか、諸葛が言ったとか、これは言っては駄目。

(木村) だけど、何を言ったかは言っていないということです。安心して話のできる枠組みを用意しましたということで、書こうと思います。

—— ほとんどの国際会議の場は、このルールを使っているようです。

—— 私の入っている委員会でも、名前は出さないで、誰が言ったか分からない、「委員」として出るのです。あれはいいですね。

2. 原子カムラについて

(木村) それでは、竹中君の発表に移ります。「ムラ」というものについて調べてもらったので、それを話してもらって、ディスカッションをして、今日は終わりにしていきたいと思います。資料は、F2-6 です。

(竹中) (スライド1) では原子カムラ (村) についてのお話をさせていただきます。

まず最初に漢字の「村」の話から入りたいと思います。参照は最近出た本なのですが、志村さんの「東電帝国 その失敗の本質」という本の中で、原子力村とは最初はこのように使われていたのではないかと、これは彼が言っているということです。使われ方としては、東京電力内での原子力部門という非常に狭い、その部門を揶揄する隠語として使用されていました。

特徴としては、他部門との人事交流がない閉鎖性。原子力部門だけ、他の部門とは違って新設された部門なので、他部門とは少し異なる性質を持っていて、特有のヒエラルキーというものを作られていました。中の人たちに言わせると、原子力部門だけ別会社のように動いているということで、実際に経営陣からもかなり遠い位置に置かれていまして、原子力部門からはどんなに上までいっても副社長までというのが慣わしだそうです。これは東電特有のことで、アメリカの会社や、国内の他の会社から見ても、東電はすごい不思議だよねと言われているということです。

—— 東電以外はそうでもないのですか。

—— いや、東芝もまったく同じです。要するに、原子力発電の専門の人たちというのは、どうしてもこうならざるをえない。まず第一に学歴レベルが他の事業の人たちとは格段に高い。ほとんど博士、修士、石を投げれば博士、修士に当たるというぐらい、高学歴。他の部門だと、学卒の比率がそんなに高くないぐらいの話です。だから、これは東電もそうだし、ほとんど同じことが東芝の中でも言われていました。

—— 電力はそうだと思いますよ。

—— 重電メーカーと電力会社は、大なり小なり同じです。

(竹中) その程度が、東電が相当異常であるという言われ方として使われていたというのがあります。

—— 志村さんは、朝日新聞の元ブンヤさんで、特に東電に密着して、ずっと取材をしてきた方で、つとにそれで有名な方です。事故後反原子力みたいになっていますけれども、それまでは東電にべったりの記者として、つとに有名だった方。

—— あまり信頼性がないような。

(竹中) (スライド 2) ここから 3 ページが、新聞の記事の検索の結果になります。

まず漢字のほうの「村」なのですけれども、新聞ではどのような使われ方をしているか、読売新聞と朝日新聞を調べました。まず読売新聞は、右にカッコで特徴で書いてあるのですけれども、スライド 1 の原子力村の定義と同じように、東京電力の原子力部門に対する記事にのみ使っています。読売新聞は確実に使い方を意識して使い分けています。

少し違った使い方として、原発立地地域としての原子力村という言葉を使っているときがときどきあります。

それ以外には、どういうときに使うかということ、国民・社会とのコミュニケーションを行ってこなかった閉鎖性。事故などの情報を囲い込む特徴。専門性が高く、原子力村の中だけで通用する文書。そういう風潮があるということを主な特徴として、原子力村という言葉を使っています。

一方、朝日新聞なのですけれども、漢字の村とカタカナのムラの区別はなされていません。基本的に、社会の風潮に合わせて、どちらのほうがより扇情的かということを考えて、字を使い分けています。

漢字のほうの村なのですけれども、最初に使われていたころは、同じ方向性をもつ専門家集団、閉鎖性という意味で使っていたのですけれども、2002 年には、部門という意味ではなくて、いわゆる国と電力会社の癒着体質であるとか、2009 年には請負業者との癒着体質ということで、広い意味で捉えて、原子力村という言葉を使っています。事故後は、利権に群がって規制が機能しない原因として、村という言葉を使っています。

(スライド 3) このグラフは、「村」と「ムラ」の使用頻度になります。左側が読売新聞で、右側が朝日新聞です。

見ていただければ分かりますように、2011 年以前はあまり多くないです。やはり事故後に原子力ムラという言葉を用いた記事が増えています。読売新聞は、先ほど言ったよう

に使い分けをしているので、漢字のほうの村はあまり出てこなくて、カタカナのムラが事故後に急速に増えています。

朝日新聞のほうは、事故後、最初は漢字の村を使っていたのですが、2012年になってカタカナのほうが非常にインパクトが強いという意味も含めてだと思えるのですが、使い方の意味合いは変えないで、単純に量だけ変わっているという変化があります。

(スライド4) カタカナのムラがどう使われていたかというのが、このスライドになります。

まず読売新聞のほうは、外部の意見を聞かない閉鎖性。もたれあいをする癒着体質。馴れ合い、安全性を無視し、反省しない体制。そして、原子力行政の関係者といった感じで、漢字の村とは違って、もう少し広い意味で捉えている記事のときにカタカナのムラのほうを使用しています。

朝日新聞は、先ほどから言っていますように、あまり使い方に変わりはないのですが、事故後に使われ始めたということもありまして、悪いところを引き立たせるような意味合いで使っています。基本的には、もたれあいの癒着体質と、原子力行政を担ってきた人という意味で、原子力規制委員長に田中氏が選ばれたことに対して、非常に多くの記事があると。もうひとつは、電力会社を中心とした、利益を得る会社という意味で使われているということです。

ここまですが新聞になっています。新聞の特徴として、スライドには書き忘れたのですが、当然ながらマスコミも原子力ムラの一員である、というようなことを書いた記事はありません。

—— 自分たちは、

(竹中) 自分たちはムラの中の人とは認識しているような感じの書き方はしていません。

—— それは、ここの2社を調べてですか。

(竹中) 2社を調べてです。

—— 産経新聞などはどうなっているのですか。

(竹中) 産経は見えていないのですが、要望があれば、新聞は増やします。

(スライド5) ここからは、インターネットの調査の結果となります。ここからは、こう

いう分類がされていますという記事がどこかにあったわけではなく、私が自分の感覚で分類したものです。そして、ネット内のみ判断なので、本当に市民の皆さんがこれらのどれかに分類されるかどうかはまだ分からないということを、まず念頭に置いてください。

まず、ネットの中で、漢字の村とカタカナのムラは、特に使い分けはされていません。どのように捉えているかは、サイトごとで多様な違いがありまして、だいたいここにある3つの捉え方があるのではないかとということで分類しました。

1つ目が、原子カムラ（村）とは、原子力産業の利権に群がる集団であるという捉え方です。aとbに分かれているのは、aは、電力会社を中心とし、金の力で支配力を行使していると。これは、いわゆる原子力を進めることによって直接的に利益をもらう人と、その電力会社からお金をもらっているから利益を得る人で分けている考え方です。マスコミとかは、広告料として電力会社からお金をもらうから、仕方なくついてきているのだという考え方がaです。

bは、全体が利益共同体であると。意思決定中心のない「ムラ社会」ということで、皆がお金で関係を持っているから、皆同じ方向を向いていますよというような捉え方です。

2番は、原子カムラ（村）というのは、原子力を専攻した人間が、原子力に携わっている人の大多数を占めるという捉え方です。どこが一番悪いところかという、大学が悪いのだ。そういう論調のときに、この2番目の考え方が出てきます。

3つ目が、もっと大雑把に、原子力を推進している集団が原子カムラ（村）であるという考え方で、これはどこが悪いかという話になると、原子力行政というものが非常に悪いということを主張しています。

この簡単な分類だと分かりにくいかと思いましたが、次から図つきで、それぞれもう少し詳しく説明させていただきます。

（スライド6） まず、1-aです。原子力の利権、特に電力会社中心となって引っ張っているという考え方なのですが、ここに図があります。顔が載っているのを引用して大丈夫なのか分からないのですが、実際にインターネット上にこういう画像が置いてあります。これはいかに東京電力が悪いか、悪の親玉なのかということ、うまく伝えるためにこの図が引用されているのですが、特徴としては、電力会社の金の力がいかにすごいか、そして、その支配力がどれだけ広いところまで広まっているのかということ、を述べています。

—— 出典が書いていないけど。

（竹中） 出典ですね。調べてからしっかり持ってきます。

（スライド7） 次に1-bです。これは、もう共同体であるという考え方で、こちらのほう

も、広範囲で利益の相互関係があると。どこが中心というよりも、どこも相互関係を持っているので、方向性が一致して、閉鎖性とか排他性が生まれているということを意図しているようなものです。これも出典書いていないですけども。

—— これが、中心がないということですか。リンクしている。核がないということですか。

(竹中) そうですね。

(スライド8) 次は、2番、原子力関係者という捉え方での原子カムラ(村)です。それぞれの名前の右下に、カッコで大学の出身を書いています。この図だと、いかに東大が悪いのかということを示唆するような内容になっております。東大から出た人たちだけが結局同じ仕事について、ということ在意図しているようなブログが多く見られます。

(スライド9) 3つ目が、大雑把に、原子力を推進している集団ということで、二元論と書いてあるのですが、単純に原子力イコール悪いものだという考え方の基に、その悪を推進している人が原子カムラの人という考え方です。

特徴として、原子力と名のつくものは悪い。あとは、推進する人たちは異常者であると。正しい判断ができずに、安全性を無視する人たちだと。この考えでは、そういう言い方がされることが多いです。

ということで、今回3つに分類させていただいたのですが、ご質問などがあれば、よろしくお願ひします。

(木村) この前もあったけど、ソースがないと議論が難しい。例えばインターネットで、大きくは4つに分類しているけど、それは妥当なのかどうか議論しにくい。

(竹中) 特徴を6、7つに分けて、それぞれの数を見ていったところ、ある特徴には触れて、ある特徴には触れていないというのが結構ありまして。

(木村) 特徴を分けてというのは、どういうプロセスですか。

(竹中) 記事の中で、原子カムラという言葉が使われていて、書いてあることの特徴が、7個ぐらいに分類できるのかなということでもまず分類しました。

(木村) その7個の分類はどれなのですか。

(竹中) パソコンを見ないとちょっと分からないんですけど。

(木村) だから、3つに分かれるというよりは、7個に分けられるというプロセスがどうなっているか。そして、7つの意見、意見というのか、ベクトル、方向性の話をしているのかにもよるけど、それぞれがどういう共鳴をしているのか、というのが見えてくるといいのだけど。

—— そうですね。いろいろなところにいろいろなことが書かれていることを、客観的に整理することがひとつ。それを通じて、何がムラと言われる所以なのか、そこを抽出したほうがいいですね。そうするとオリエンテーションのときに使えるのではないかな。

(竹中) 学術として妥当性を得るためには、検索の件数はどのくらい必要ですか。これは「ムラ」と「村」で、Google 検索の上から 100 件ずつなのですか。

(木村) 別に 100 件ずつで構わないのだけど、どのようにして分類したのかというプロセスが見えていないので、これが妥当かどうか分からない。

(竹中) 自分の感覚なのですが。

(木村) いや、感覚にしても基準があるわけでしょう。7つぐらいの特徴があって、それをどうやって分類するのかとか、その辺はある程度プロセスが見えないと。

スライド 1 は本の紹介でしょう。スライド 2、3 は、新聞のほうでしょう。この新聞の話も、まあこんな感じだろうなとは思いますが、証拠としては少し難しいというか。そうなんだ、という感じになってしまうので。本当ですか、と言われたときに、本当ですと言える証拠があったほうがいい。

(竹中) 新聞のほうの証拠というのは、どういうことですか。

(木村) スライド 2 は、新聞を調査した結果のまとめでしょう。どうしてこういう性質を持っているのかということについて、論理的に説明できないと、たぶん、そう言っているだけじゃないの、と言われてしまう。

すみません、私がすると学問的な突っ込みになってしまうので、皆さん、どうぞ。

—— 私から見ると、1-a にしても、1-b にしても、どういう人が原子力の仕事に関わっているのかというのを並べてあるだけに見えます。この資料で言うと 13 兆円の仕事をやるのだから、国もゼネコンもメーカーも皆関わるわけです。こういう人たちが関わっているというのを並べているだけの話。ごく当然の話でしかなくて。それが、利権という表現だけ

れども、それだけのことを仕事をするのに関係している人は、こういう広がりになっているという事実関係を整理しているだけに見えます。

(竹中) 細かいところになるのですけれども、1-bの図の、例えばメディアと電力会社の矢印のところ、「接待旅行」であるとか。単純に仕事ではない関係を、矢印に入れているのですよね。そこら辺は、単純な広がりではなくて、癒着なんだというような意図です。

(木村) 洗脳放送とかありますね。

—— 洗脳放送って書いてあるのですか。

(木村) 書いてあります。メディアから一般国民への矢印が、洗脳放送ですね。

—— 原子力を悪だと思っている人は、広報のことを洗脳放送だと思うでしょう。中国の尖閣問題で、あれだけ中国が怒り狂って大騒ぎして、日本の企業を壊したけれども、中国の国民は、あれを肯定しているわけで。原子力をやる人は原子力の宣伝をするから、広報活動だし、原子力を悪だと思っている人は洗脳だということかもしれないけれども。だから、それぞれの立場で表現はあって。

だから、何を言っているかという、要するに本質が、例えば今言われたように、マスメディアの人と電力会社の人が、そういう接待関係を持つちゃいけないと。そういう規範、何かに違反している。例えば、2002年に起きた東電問題というのは、検査でひび割れが見つかったのにそれを隠していたと。これは明らかにルール違反でしょう。そういう問題は明らかに規範違反だから、指弾されてしかるべき。

それだけではなくて、クラック問題をきっかけに調べてみたら、1万件も、原子力だけだと3000件だけでも、そういう情報の隠蔽がその後芋づる式に見つかった。なぜそれまで隠していたのか。それこそ原子力ムラの閉鎖性だということで、2002年、2003年にかけてずいぶん騒がれた。そういうことは、ムラの体質の悪い点だと思います。

だけどそうではなくて、仕事の関係でつながっていて、そこにお金がこれだけ流れているのはけしからんといっても、仕事をやるのだからお金は流れるのですよ。

(竹中) いや、それはわかるのですけど。

—— これは竹中君がインターネットを調べて、これが特徴的に表していると思って、資料として持ってきただけですね。

(竹中) インターネットに意見を載せている人の、個人の主張が論理的に正しいかどうか

かは別に見ていなくて。その人が、例えば、ここからここには何億円のお金が出ていますとといったときに、その何億円が、実際に仕事に必要なことかどうかは問題ではなくて、「こんなに多くのお金が出ています。こんなに悪いことなんだ」と書いているわけです。その人は明らかにそれが癒着だと感じている、ということを言いたいわけであって。

—— イメージでしょう。要するに。

(竹中) そうです。

—— 一般の人たちが持っているイメージを分類すると、この4つになるということですよ。

—— 一般の人ではないですよ。インターネット上で出ているのでしょう。

—— 失礼、そうですね。

—— おかしいと思うのは、原子力ムラと検索して、「原発立地地域」は出てこないのですか。

(竹中) インターネットでは、検索の上のほうには出てこないですね。

—— 出てこないのですか。

(竹中) 200件の中の、せいぜい1件とかです。それも、元々の記事の引用とかで出てくる。

(木村) だから、ネットのまとめとしてはこういうものでいいと思うんだけど、これです、というには少し説得力が足りない気がするので、説得力を持たせてあげたほうがいい気がするのです。

(竹中) 説得力を持たせる、の意味がよく分からないのですが。

—— けどそういうイメージで、今みたいな、東大が悪い、原子力工学科卒業が悪い、それで東芝が悪いみたいに、それで御用学者のレッテルを貼って。それで、規制委員会には東大出身者は一切入れないとか。そういう図式で民主党は人選したらしいのですよね。

だから、そういうイメージで作られているということを整理するのは、非常に意味のあ

ることで。先ほど出典を聞いたのは、それぞれの人たちが持っている、書いている人ごとで規範が違うと思うのですよね。どういう規範でその人はムラの定義をしているのかというのを、少し浮き彫りにするといい気がします。

このスライド 4 に書いてある読売と朝日の定義、これは非常にもっともというか、こういう体質や、安全性を無視する、反省しない。それはけしからんというのは、誰しものが共有できる定義だと思うのですね。やはり大新聞はそれなりに節度を持っていて、「ムラ」と言う以上は、それなりの規範があると思うのですね。

—— 質問していいですか。新聞で、原子カムラ（村）という言葉が、どういう意味で使われているかということは、記事を、100 件でしたっけ。

（竹中） いや、新聞のほうは全部です。

—— 原子カムラ（村）という言葉が使われている記事を全部お読みになって、分析したということですか。

（竹中） そうです。

—— これはすばらしいと思いますね。記事は要約していないのですから。この 4 ページ目はいいと思うのですよね。

（木村） だから、まず、インターネットのほうでやるべきことは、それぞれの定義がどうなっているのか、定義をちゃんと並べるといことですよ。

そもそも、リンク貼っているとか、相互的にやっているとか、100 件のうちのどれが一番大元か、というのもあるでしょう。どうせ、いくつかのものに集約されていくのでしょう。リンクとかを見ていくと、同じ図が出てきたとかもたくさんあるのではないですか。

（竹中） いや、そんなにリンクはなく、結構バラバラですね。

（木村） バラバラだとしたら、まず、先ほどもありましたけど、それぞれの人はどういう定義をしているのか、ちゃんと分かるように自分の中で整理しておくべきだと思います。それがデータ集になりますからね。

（竹中） でも、それぞれの人が、定義は何です、と言っているわけではないですよ。

（木村） でも、新聞のほうは、ある意味、竹中君が記事を読んで、定義をしているわけ

でしょう。こういう作業をやればいい。

(竹中) ああ、それはデータとしてはあります。

—— スライド 6 は、天下りのことをかなり、人とお金の流れを言っているよね。だからそれは、この記事の執筆者のひとつの定義だと思うのですよね。だからそういうふうに少し整理してみるといいかもしれない。

(木村) そうです。だから、データがあるのだったら、そのデータをある程度共有しておかないと、結果だけ見てこうなりましたといっても、それが本当かどうか、私たちが検証するチャンスがないわけですよ。

—— そう。どういう作業をして、こういう結論になったかということをお教えしてもらえると、よく分かるのですよね。

(木村) それがないと、我々はこのデータを信じられないのですよ。だから、信じられるようなデータ構成で出してくれると助かります、というのが私のお願い。それがソースとちゃんと 1 対 1 対応でリンクされるということが、結局学術的にも意味のある分析なのですよね。

そうでないと、単に感想文としてまとめました、と読めちゃう。それだとあまり意味のない分析になってしまう。我々の報告書の中でも、こういうものがあります、と出しにくくなってしまいます。ちゃんと証拠を作って、データベースを作って、だから、7 個の意見の方向性があるって、それで分類しましたと言っていたわけでしょう。7 個あると言っている割には、ここで出てくるのが 4 個だし、4 個と 7 個がどういう関係があるのかとか、そういうのも全然分からない。そこをもう少し明確化してくれれば、という話です。

—— 1-b は、先ほど竹中さんの説明にあった通り、表の利害関係があるにも関わらず、裏で仲良しクラブみたいな付き合いをしているのはけしからんと。それを、1-b の細かい字で書いているところに言っていると。それはひとつの視点ですよね。そうやって整理するといいかもしれませんよ。

(木村) ムラというのを、物質として見ているわけではないでしょう。何か組織があって、それがムラというような定義は、必ずしもしていないでしょう。ムラというものが定義づけられるいろいろな要素の中には、組織の持っている性質、閉鎖性とか癒着体質とか、そういうもので、ムラを定義しているわけですよ。

こちらのインターネットの分類は、物で分けようとしているでしょう。そこが、同じ粒

度になっていないのですよ。そこをもう少し、粒度を揃えてくれると、今の議論ができる。

—— 1-a は人と金の流れを言っていて、1-b は表裏の関係を言っていて、2 は学閥を言っている。そういう整理をすると面白いね。

(竹中) 性質はたぶんあがるのですよ。性質からここの分類までは、若干自分の中でまだ整理できていないのですが、プロセスとして飛んでいる気がするのですよ。性質だけで持ってきたほうがいいですか。

(木村) それはだから、どういうものがあるか、データが見えていないから、私には何とも回答できない。

—— 先生、今、リュウドとおっしゃいましたけど。

(木村) 粒の大きさです。だから、大きい粒と小さい粒があって、それを同じ土俵にするのは、あまりよくないのですね。やはり分類をするのだったら、同じ大きさのレベルに合わせて分類しないと意味がないと。

—— そのやり取りはよく分かります。

(木村) でも、実はこういう出され方が、割と業界からの情報の出し方なのですよね。本当は知りたいのは、背景にある証拠だったりとかするのだけど、そういうのはなかなか出てこない。

情報の出し方が分からない人が結構いるのです。専門家側にも、ちゃんと学問をやって、証拠というのは論理的に出すものだ、ということが分からない人も結構いるので。

—— 素人目には、1-a、1-b とかを見ると、ああ、原子力ムラというのが、こういうふう
に捉えられちゃうんだな、みたいに、ダイレクトに捉えることができますよね。
それが本当は違うのだったら、コミュニケーションを取ることによって、ムラのほうにい
る方からすれば、そうじゃないんだという言い方もあるだろうし。あと、市民側もすごい
いっぱい誤解があって、そこを突き崩していく、歩み寄っていくというところがあるのか
もしれません。

—— このムラの話、オリエンテーションのときにするのですか。

(木村) やってもいいし、やらなくてもいいと思います。

—— 私は、これは、最終的に皆さんの中で、何か分かってくるのではないかという気がしますね。

—— 自分なりの解釈が出てきますよね。

—— 最初に見せてしまうと、固定化しちゃうかもしれない。だって、市民にとっては、よくまとめられた表なんだもん。

—— 最終的には、このフォーラムとしての原子力ムラの定義が浮き彫りになると面白いと思う。

—— なっていくと思いますよ。

—— 市民にとってはよくまとめられているように見えるけれども、もしかしたら、電車の中釣り広告みたいなものかもしれませんね。

—— そうですよ。だから分かりやすいっていうこと。

—— それを勝手に誤解している可能性が高い。

—— 自分から勝手に想像して、ムラというのはこういう感じだよ、という感じですよ。

—— ここから詳しく背景とか何かは分析しなくて、ここから誤解やら思い込みやらが発生していくと思うのですよね。

(木村) だから、最初は、ムラというものに対して、こちらから情報をあげないで、むしろ、どういうものをイメージしているかというのをいろいろ聞いて、話し合ってもらおう。

—— そのほうがいいのかも说不定ですね。

—— 最初の1回目はそれでやって。最後の5回には、それがどう変化したかと。

私も、この委員会に数回出ているだけで、自分の中でもものすごく変化していますね。

—— 1-b とかは、もう少し詳しく分析してほしいですね。

それと、新聞は2社だけでいいのでしょうか。

(木村) 朝日、読売というのは、2大新聞なので。

次に入れるとすると、毎日、日経、産経ですね。産経は5番目ですね。

—— あとは、ちょっとローカルになるけど、東京新聞も、ときどき変なことを書いたりしていますよね。

—— 原子力に対するポジショニングで言うと、一番反対側に位置しているのが東京新聞。東京新聞、中日新聞というのは同系列なので、東京新聞、中日新聞が一番反対です。朝日新聞がその次。一番推進側に位置しているのが産経。その次が読売。真ん中にいるのが日経。毎日は、真ん中よりも少し朝日寄り。こういう位置関係です。

(木村) あとは、これは全国紙なので、他にやる価値があるとすれば、ローカル紙ですね。その中でムラはどう使われているか。福島の中でどう使われているか。

—— 福井新聞とか。福島民友とか。

—— 地方新聞の記事は、共同通信社が配信したのものを使うことが多いです。そういう意味では、共同通信がどのように言っているかということが、影響は結構大きいですね。

(木村) ただ、地方紙になって、原子力が身近なところになってくると、共同通信ではない記事がいっぱい入ってくるので。

—— 立地県はそうですね。

(木村) 立地県はそれが入ってくるので、それを調べてもいいかもしれません。

ということで、今のような意見をいろいろ踏まえて、少し検討してもらえればと思います。

3. その他

(木村) ということで、30分もオーバーしましたけど、これで本日の会合は終わりにしたいと思います。

次回(第4回)は、12月21日(金)10:00~12:00になります。次回は、調査票の締

め切りになりますので、最終チェックをしてもらうことになると思います。最終チェックが一番のメインになります。少し時間もあると思いますので、竹中君の話題提供をもう少しシビアにしてもらうというのもありかなと思います。

その後は1月8日(第5回)と1月18日(第6回)に決めています。今日お話の途中になってしまいましたけれども、実際に5回をどのように回していくかということについて、具体的に詰めるのが1月8日です。10時から17時までとっていますので、よろしく願いします。その後はせっかく新年だし、もしお暇であれば新年会でもしましょうか。

2月中には終わりにしなければいけないので、残り2回くらいをどこかで開催します。そのときには人選と、あとは進め方をマニュアルにすることが必要になってきますので、そういうことを議論したいと思います。

今日は3時間の予定が3時間30分になりましたけれども、これで終わりにしたいと思います。

—— 次回話すことかもしれませんけれども、事前に参加者に、「原子カムラ」について意見をまとめてきてくださいみたいに、言うのですか。

(木村) 言わないほうが良いと思います。

—— 構えないほうが面白い。

(木村) 構えないほうが、自由な意見が出るし、いろいろ発展性がある気がします。

—— 変な意味で調べてきてしまったりすると、それで色がつきますよね。

—— その場の雰囲気をよく読んで、ああ、こう言ったほうが良いかなとか、ありますよね。

—— そういう気持ちが働くときがあります。

(木村) ということで、その辺りの具体的なことについては、第5回ぐらいでやりたいと思います。次回は調査に向けての細かい修正とかチェックをしたいと思います。

それでは、長い間、どうもお疲れ様でございました。これで第3回会合を終わりにします。

以上